
波乱万丈の野良犬

素人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

波乱万丈の野良犬

【Nコード】

N6549J

【作者名】

素人

【あらすじ】

大学2年の高山和彦はゲームをやった時に何者かに後ろから殺される。

彼が気づいた時そこは元の世界ではなく自分はホームレス（笑）の中学生になっていた。銃とナイフのアクションものです。よろしくお願いします。

（注）超不定期更新になります。すいません。

プロローグ（前書き）

初めてです。よろしくお願いします。

ブローグ

「わん。」

犬だ。

「わんわん。」

犬科犬目の毛だけらのあれだ。

（なんの犬・・・？）

じゃなくてここどこ？

ここでやつと彼はそれに気づいた。

小汚い部屋の中で一人黙々とゲームをしている青年がいる。

彼の名前は高山 和彦

普通の大学2年生。身長は平均の少し上。成績と身体能力は中の下だ。

「はぁ！とりゃー！！」

彼がプレイしているのは昨日自腹で買った『Wanted』と言うゲームである。

『Wanted』とは2008年公開のアメリカ映画でガンアクションものだ。

そして彼が今やっているのはその後発売されたゲーム。正式名『Wanted: Weapons of Fate』

映画の続編として作られたゲームで、和彦が自腹で買った。

「無駄無駄！！」

画面の中の操作している主人公が隠れた敵を銃で撃ち殺す。

和彦は昨日買ったゲームをすでに3回もクリアしていた。

「終わった終わった。」

彼がコントローラーを放り出すと同時に画面がゲームの終わりを映す。

「~~~~~」

彼がご機嫌で鼻歌を歌うと、不思議な事が起こった。

「~~~~~」

突然テレビ画面の真ん中の部分が黒くなった。

（なんだ？）

和彦が画面に触れると指にぬるりとしたものがついた。指を見るとそれは黒ではなく赤かった。

（なんだ？ペンキ？血？誰の？）

そこまで考えて自分の胸が異常なまでに熱くなっているのに気づき、目の前が真っ暗になった。

「わんわん。わん？」

一人の少年が川沿いの土手で座り込んでいた。

その隣では野良らしき犬が少年を吠えていた。

少年はしばらく吠えたてる犬を見ていたが、我に返ったように近くで流れている川へ走る。

野良犬は自分の満足いく反応ではなかったのか少年の近くに走り寄っていく。

そして川近くに寄った少年は水面に写った十五歳くらいの自分の顔を見て

「.....」

しばらく水面を見たまま動かなくなり

それを見た野良犬がもう一度吠えた。

「わん」リモコンはどこだ。「わ、わん？」

そのままゆっくりと仰向けに倒れて動かなくなった。

後に彼はこう語る。

『人間最高に驚くと、とりあえず口の中の単語を言いたくなる。』
と。

『あと気絶する。』とも言った。

プロローグ（後書き）

感想お待ちします。

祝 初別世界。(前書き)

ご感想待ってます。
遅筆ですいません。

祝 初別世界。

天気は晴れ。川沿いの土手は鳥が鳴き、野花が風に揺れる。川が光りを反射し、流れていく。

まさに一枚絵のような光景。唯一難点をあげるなら、

川の近くに作られた青いビニールシートの仮設テントがすべてをぶち壊していた。

そして川の前にいる薄汚い野良犬と乞食中学生が土手の一枚絵の題名

『平和と川』を『貧困と現代社会』にかえていた。

そのリアルホームレス中学生こそ元大学2年生 高山 和彦その人だ。

そして和彦がここに来てから二週間が経っていた。その様子をダイジェストでご覧いただく。

初日

（ないないないないないないばあ。じゃないよ！ここだれ！？俺はどこ！？おいおいおいおいおいおい落ち着け俺、Be cool be happy ってちがう！！！夢！？夢？！かこれは！？おいおいおいおいおい冗談だろジェファニーH A H A

HAHAHAHA あ、これ大学のレポート出さなくていいじゃん。
わーいわーいちがーーーーーう!!!!!!!!!! 落ち着け落ち
着け落ち着け落ち着け落けおおおおおおおお・ち・つ・け
あばばばばばあ、俺一人暮らしじゃん!!!! ま、ま、ま、
まさか だ、誰一人気付いてないんじゃない? 気付いて誰かー
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!)

二日目

(はあ、日本の警察は何やってるんだ。友人達は。あ、
頼りにならない奴ばかりだった。
のど渴いた。体の節々が痛い。あれ、この川。
チャレンジ!!!!!!)

三日目

腹痛と下痢につき思考停止中

四日目

「はあ。はあ。」

(し、死ぬかと思った。泥水100パーセントじゃん。
あ、雨がなかったら下痢で死んでた。でも寒いな
あ、さすがに雨降ると。犬つて毛皮だよなあ。
枕代わりにできれば。)

「。」

「。わん?」

「。おりゃあ「がぶつ!」ぎゃあああああ!!!!!!
!」

一週間

（このビニールシート大丈夫か？てか犬なんで中に………。
）
ぐううううう

（は、はらへった、どうしよう……この犬は……）

「……」（ちらつ）

「……」（ギョロツ）

（く、食われる……！）

一週間と二日

「か、川め………がふ」

釣った魚とザリガニにあたり思考停止

～現在～

（ハラヘッタ……）

だいたいこんな感じである。見てきたように和彦はここからあまり動いていない、なぜか？

彼の中に親からもらったある言葉がある。

『迷子は動くな。』

しかし彼にも限界が来ていた。（胃袋的な意味で）

（げ、限界だ……う、動こう……ここにいたら餓死する……）

川の上流にうつすらと町並みが見える。

なぜ行かなかったか？それは土手の近くの看板のせいだ。

『クラーンタウンここから右』

この看板の意味を認めたくないが言おう。

「ここ日本じゃない。外国よー。」

そうつぶやきながら和彦は拾った黒いジーンパンと落ちてた青いシャツを着た。

穴だらけのスニーカーを履くと道を見渡し、
ため息を少し吐くと疲れた体にムチを打って歩き出した。

野良犬はそれを見て

少し考えてからついて行くことにした。土手をうろつくより面白い
と思ったようだ。

彼はまだ気付いてない。日本どころかここが別世界だということに。

『クラウンタウン』

和彦が初めて人を殺す所だ。

祝 初別世界。(後書き)

次回は初の戦闘シーン・・・かも。

路地裏の悪夢（前書き）

戦闘シーン、次に回します。すいません（泣）

路地裏の悪夢

ワイワイワイワイワイワイワイ
ガヤガヤガヤガヤガヤガヤガヤ

町、人々が集まる場所である。

時刻は昼。ここクラウンタウンでも様々な人々が各々の目的地へ向かって行った。

その町のメインストリートの小さい本屋に中学生と犬一匹がある本を立ち読みしていた。

その本屋の老主人はその中学生を監視していた。なぜか？
立ち読みのせいではない。犬がいるからでもない。

少年の顔に『絶望』が張り付いていた。

読んでいる本の題名は『猿でもわかる世界史』世界地図付き』

あやしすぎる中学生だ。

（おおおおおおおおおおおおおお落ち着こう、落ち着け！ジヨナサン！
じゃない！！俺！！）

メインストリートの石畳の上を和彦は震えながら歩く。

（だいたいおかしいと思え！外国なのに！看板の文字が！カタカナ
なんて！）

徐々に歩く道先に人影が減ってゆくが和彦は歩く。

（なんだ！ジパングって！日本だ！JAPAN！ニッポン！）
細い路地裏に入るが気付かず歩く歩く。

（どどどどどうする！？どうすんのおれ！？ライフカードで続く？
？続いててたまるかー！ー！）
犬が不安そうに和彦を見るが歩く歩く歩く。

「べ、別世界・・・」
「わん？」

都合二週間、和彦はついにその結論に至った。犬が首をかしげた。

（そ、そういえばあの地図の日本の位置が右の方にあつたぞ。じゃ、
じゃあ平行世界とか言う奴か？）
歩く。歩く。歩く。歩く。歩く。
和彦は頭を抱えながら歩く。

（こ、これからd『カンツ』うわ、な、なんだ！？）
和彦が足下を見ると鋼色の細長いものが落ちていた。手に取って目をこらす。

握りやすいグリップ、片方が刃、刃の背には鋸刃、実用的な形。

（なんだ、サバイバルナイフか・・・ヘ？）
驚いて前方に目をこらすと、

一人の男が二人の金髪と銀髪の男にミンチにされていた。

二人ともナイフを持っていた。しかもその二人と目が合った。

最悪だった。

路地裏の悪夢（後書き）

感想待ってます。

どっきりの看板（前書き）

感想をお願いします。

さらに近寄る金髪。

ドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドクンドク

（動け！うごけええええ！！俺のあじいい！！今逃げなきゃばいばい！！！！）

銀髪の男がニヤニヤ笑っている。彼の頭の中では目の前の少年が切り刻まれていた。

金髪と和彦の距離はもうほとんどない。

ドクドクドクドクドクドクドクドクドクドクドク
（あわわわわわわわわわえらいっこちゃえらいこちゃよい
よいよいよいよい）

金髪は止まった。ナイフの射程距離だ。いままでこの距離ではずしたことはない。

中学生の和彦は相手を少し見上げる形になった。

$$\mathbb{E}T_0$$

(びつくりくりくりくりつ kじゃ ねえええええ!!これってもうにげ)

金髪がナイフを持った手を突き出した。ねらいは心臓。

「じゃあな、ガキ。」

和彦は思った。

（あ、死んだな。俺。）

10cmほどのナイフの刃は和彦の胸に吸い込まれるように刺さり、皮膚や体のさまざまな血管を突き破って心臓に刺さり、殺す。

はずだった。

刺される直前、和彦には視界にあるすべてが遅くみえた。(……
……)

(ああ、確かこれは死ぬ間際にすべてがスロウに見える病……俺、
終わったな。)

空気中のほこりまで止まって見える。もちろん男の突き出している
ナイフも。

しかし所詮この現象は魔法ではない。ゆっくりとだがこちらにナイ
フが迫ってきている。

(ああ、助けてマイケル・ジャクソン……あ、死んでるじゃん。
……なぜマイケル?)

そのとき、誰かの左手が向かってくるナイフを掴んでいた。

(え、ま、まさかマイケル!?!?!まじで!?!俺の願いが天国のマ
イケルに?!?!?)

向かってくる金髪の手がナイフの刃を掴み、
和彦の命を守っていたのは意外な人物だった。

和彦自身だった。(……)

(え、タラコスパゲティ?じゃない、俺?)

久しぶりの。(前書き)

ご感想待ってます。

久しぶりの。

「ワン！ワン！」

（ああ、犬の鳴き声が聞こえる。）

目を開ければ夕日の光が空を染めていた。

（あれは・・・夢だったのか？）

起き上がってみればそこには、

アゴが砕けた死体が転がっていた。

光のない目とまた目が合った。

「

」

この日和彦は声にならない悲鳴を上げて路地裏を駆け抜けた。

町の中央にある噴水広場。

そのベンチに座り和彦は物思いにふけていた。

内容は

（や・・・やってしまった。）

先ほどの殺人のことだ。

（ついに俺も犯罪者・・・ど、ど、ど、どうすれば・・・）

頭を抱える和彦。

そのとき、彼の頭にアイディアが舞い降りた。

「ありがとうございましたー。」

店内で食べた。

（うまかったー。満腹満腹。あれ？なんか忘れてる・・・）

「わん！わん！」

「・・・お前か。」

（仕方がない。ドックフードを買ってやろつ。・・・まだ忘れてるような。）

ふと自分の服を見る。ひざの部分に血がついてる。

（あ、服も買おう！デザートのもンブランケーキも！）

和彦は夜、町から戻り土手ですべてを思い出し、叫ぶことになる。

「俺のばかあああああああああああ!!」

久しぶりの。(後書き)

今回短くてすいません。

次回は和彦、懺悔のときです。

不穏な影（前書き）

かん・・・そう・・・げふっ

不穏な影

夜はどこでも来る。この土手でも。

その土手にある青いビニールシートの中で

和彦はあぐらをしていた。手を胸の前で合わせ目を閉じている。犬は近くで寝ていた。

そして和彦の前にあぐらの原因たる白い箱があった。

（俺はクズだ。それも最低のクズ！クズ！クズ！変態！変態！変態！変た・・・ちがう！！）

あぐらをしてるのは座禅の仕方がわからないからだ。

（おまけに故意じゃないけど金まで盗んでしまった・・・）

ちなみ今彼の来ている服はその金で買ってしまったものだ。その金で飯まで食べてしまった。

（さらに一人だけならまだしも・・・二人も・・・お、俺が・・・殺した・・・。）

右ヒザにいやな感覚がよみがえる。

和彦は新しく買ったジーンズの上からヒザを擦った。

サササササササササササササササササササササササ

（消える消える思い出すな思い出すな消える）

しばらくしてまたあぐらをする。

(い、いや、しかしだ・・・)

和彦の心の中からある言葉が思い出された。敬愛する友人の言葉だ。

『一人殺そうが百人殺そうがどっちも地獄逝き。』

(言い訳はできない。俺は二人も殺してしまった。体が勝手になん
て言えない・・・)

いや、俺だ。)

(しかしだ・・・)

和彦にある考えが浮かぶ。

(いいんじゃないか・・・？俺はこの人間じゃない・・・この
法律に従う義理はない・・・)

友人が言っていた通りなら俺は地獄行き確定・・・しかしそれは
遅らせることはできる・・・)

つまり殺さないで死ぬか、殺して生きるか。

(なんであんなナイフの扱いがうまいのか知らないが・・・やれる、
俺にはその力がある・・・)

そして俺は死にたくない・・・)

ベルトに差してあるナイフを手取る。

川で洗ったので刃の部分に汚れも血痕もない。

目の前に持ってくる。青いビニールを通した月明かりを受け輝いた。
和彦は息を吸うと覚悟を固めた。

「自首しよう。」

（無理無理無理！俺一般人だし！どこぞの主人公じゃあるまいし無理無理！人殺して開き直る
精神構造してないしてない！それに以外と刑務所の方がいいかも
しれないし。）

そして目の前の白い箱をみる。
中には好物のモンブランケーキが入っているが・・・

（人を殺した金でケーキを食べておいしいか！？おいしいか！？俺
！！）

こぶしを握りしめる。

（ちがう！！ちがうぞ！！俺！！！！こんな！！こんな事をして食べて
もおいしくない！！）

立ち上がって箱を掴むと上にあげる。

（こんな、こんなモノオオオオオオオオ！！！！）

ぱくぱくぱくもぐもぐもぐ

（いやあ、ケーキに罪はないよねえ）。うん。パパも言ってたじゃないか。）

『残すな！食べ物を粗末にするな！』

（仕方ないよ。うん。）

ぱくぱくぱくもぐもぐもぐ

静かな夜に食べ物を咀嚼する音が響いた。

クラウンタウンビル街

ジリリリイイン ジリリリイイン ジリ「ガチャッ」

「俺だ……おう、どうだ。……はぁ？見つからない？」

「顔がわからないで済むと思ってんのか！！あの二人を殺した男だぞ！？意地でもさがせ！！」

俺らレミトファミリーの未来がかかっていると思え！！」

「時間？……あると思ってんのか！？俺らがどこの組織と殺し合っていると思ってんだ！！」

「そうだ！秘密結社クロノスだ！理解したら探せ！使えるなら野良犬でも使え！

わかったか！？……わかったら探せ！！」

ガチャン！！

犯人は・・・（前書き）

主人公の会うのはいつになるやら・・・

かなりしばらく待ってください。すいません・・・

犯人は・・・

次の日、和彦は街に来ていた。
なぜかというと

（父さん！母さん！次郎！三郎！あ、次郎と三郎はいないや。とにかく俺、自首するよ！）

自首するためだ。

「・・・これで俺も社会のくずか・・・」
「わん？」

路地裏

「いいんつかあ？ここで突っ立てて？」
「馬鹿！！突っ立てんじゃない！待ってるんだ！」

路地裏で黒服の男が二人話し合ってる。

「待ってるって、ここで立ってるだけじゃないすつか。」

「馬鹿野郎！！犯人は現場に戻るもんなんだよ！！」

片方はだらしなく黒服を着ている20代。チンピラのような男。

もう片方は黒服をそつなく着こなしてる30代。スキンヘッドの男。

一見すると似合わない二人だが二つ共通点があった。

同じ組織・レミトファミリーに所属していること。

もうひとつはここで殺人をした人物を探している事だ。

（まったく・・・）
そう思っているのはスキンヘッドの男、彼の名前はキジル・レーベル。

（いくらファミリーが人手不足だからってこんなチンピラしかいないのか！？）

彼の所属するレミトファミリーはそこそ大きい組織だが、ある問

題を抱えていた。

その名は人手不足。それも重度の。

それについてはある理由があり、キジルはそれについて理解はしていたが納得してなかった。

現にこんなチンピラが一時的とはいえ、自分の相棒である。悪態もつきたくなる。

（任務がなければこいつに礼儀とマナーを叩き込むんだが……。）

彼らに限らずこの街にいるレミトファミリーはある任務があった。

昨日、レミトファミリーの幹部がさらわれた。

護衛の任務にいたファミリー約10名は昨日、ゴミ捨て場で発見された。

正確にいうと部分^{パーツ}で。

犯人は現在抗争中の相手が雇った二人組の殺し屋と判明、幹部の生存は絶望的だった。

ところが幹部は瀕死の状態だったが生存していた。
おまけに二人の殺し屋は近くに死体で転がっていた。

しかし幹部は重体で誰がやったかわからない。
そこでレミトファミリーのボスが出した判断、すなわち。

『そいつを連れてこい！あわよくば！仲間に取り込め！』

（ボスの気持ちもわかる。使える奴なら確かにほしい……。）

キジルはボスの気持ちがよく理解できた。

（なにせ抗争の相手があのか『クロノス』だ。戦力はあればあるほどいい……。）

殺された殺し屋二人はあのクロノスが雇った殺し屋。
これを殺した相手は相当な実力者のはず。

（犯人は必ず現場にもどか『キジルさん、ヒマだからオレ帰っていいすっか？』

キジル・レーベルは現在の相棒を殺したくなった。

同じ頃

和彦は迷っていた。

（交番の場所知らないじゃん。どうしよう・・・）
和彦は警察のいる場所を考えた。

（あ、そうだ。路地裏いけばいるじゃん。現場検証で。）

和彦は行き先を路地裏に変えた。歌を歌いながら。

「今は♪もう♪動かない♪和彦くんの、とけい〜♪」
「わん？」

気づけよ。(前書き)

感想お待ちしています。

気づけよ。

路地裏

和彦は絶望していた。なぜか？

前のほうに見える二人の黒服の男達のせいだ。

（ああ、審判の時だ………^{タイホ}）

和彦は警察だろうと思われる二人を見ていた。

こうも思っていた。

（黙秘したらカツ井たべ……俺の馬鹿野郎ううう！そんなにクズか！？俺は！？）

落ち着くために深呼吸し、ポケットに手をつ込んだ。

中にはサバイバルナイフが入っている。つまり証拠品だ。

（これを出せば真実と信じてくれるだろう……そして俺は犯罪者……）

和彦は絶望しながら目の前の男達に近づいていった。

キジル・レーベルは我慢していた。

（おさえる・・・おさえるんだ・・・おれ・・・こんな奴とはいえ、
現在はおれの相棒・・・）

短気な彼は珍しくらい我慢していた。

（相棒とは支えあ「おゝい、キジル」、きいてんすつか？」

（こ、殺してやりたい・・・）

彼がそう思った時だ、チンピラの声が変わった。

「おい、今忙しいんだ。消えろクソガキ。」

（なんだ？）

キジルが顔を上げると前の方に中学生くらいのガキと犬がいた。

しかし、キジルはそいつをチンピラと同じく、ただのガキに見ることが出来なかった。

（な、なんだこの目は！？）

キジルが驚いたのはその目だ。

（せ、生気がない！濁った魚の目をしてやがる！こんな目をしたガキがいるのか！？）

そのガキの目は絶望に染まっていた。

「おい！聞こえないのか！クソガキ！」

（ま、まさかこいつが……ま、間違いない！犯人はこいつだ！目でわかる！）

「このクソガキ！殺すぞ！」

目の前でチンピラがガキを蹴ろうとしていた。

「ま、待て！！」

キジルは止めたが遅かった。

和彦は迷っていた。

（ど、どうやって自首しよう……）
それは自首の方法だ。

黒服の男達の前に出たはいいがそれで迷っていた。

黒服が何か言っているのが気づかないほど。

（そ、そうだ！サバイバルナイフを出して俺がやったって言えばいいんだ！）

和彦はポケットの中のサバイバルナイフを相手にみせようとした。

「じつは、このクソガキ！消える！」

（が、ガラ悪いな！ここの警察！）

そう思った時、目の前で警察だろう男が足で和彦を蹴ろうとしていた。

しかし和彦の体はそのまま蹴られなかった。
具体的に言つと反撃した。

自分を蹴ろうとしている相手の足を掴むと、右手に持ったナイフで相手の胸を刺した。

ザクッ

「ゴフッ！！」「ドサッ

（またやったああああああああああ！！！！おれのバカアアアアア！！！！）

キジルは思っていた。

（な、何て野郎だ！）

チンピラが死んだことではない。職業柄、いろいろな仲間の死を見
てきた。

（な、なんて鮮やかな手並み・・・！！）

そのナイフの使い方だ。

あまりに自然な行動。ためらいがまったくない。

（こ、こいつ！ガキどころかプロの殺し屋だ！）

それも自分より強い。

そのガキがこつちを向いた。その目には光がなかった。

（ま、また罪を重ねてしまった・・・）
和彦はさらなる絶望に染まっていた。

（こ、こうなったら・・・）

和彦は残ったハゲの警察を見て、覚悟を決めた。これしかない。

（零距离土下座しかない！！！！）

零距离土下座、それは読んで字のごとく相手との距離を0にし、誠心誠意土下座をする、というものだ。

（この距離ならイケル！）
そう思い、相手を見た。

（こ、こいつ！今度は俺を！）

ゆっくりと近づいてくる男。

キジルは死神が近づいてくるように思えた。

（こ、殺されるー！！）
「まっ、待ってくれ！」

(いくぜ！零距离土下座！！うおおおおおおおお！！！)
和彦がそう思った時だ。

「まっ、待ってくれ！」

(へっ？)

「俺はレミトファミリーのキジル！ は、話をきいてくれ！！」
(……………ファミリー？シルバニアファミリー？)

(け、警察じゃなくてマフィア……………?!?!?)

前菜・・・うまい！（前書き）

今回短くてすいません。

前菜・・・うまい！

ここはクラウンタウン、時刻は昼時。

中央街のファミレスは昼時にもかかわらず人がさっぱりいなかった。

入り口に黒服のゴツイ男達がいるからだ。別にマスコットキャラクターではない。

中では二人の男と犬が一匹がいた。

ファミレス内部

「まずはうちの馬鹿が迷惑をかけた。気にしないでくれ。」
そういうのはキジル。

「・・・ああ、はい・・・」
（いや、無理でしょう・・・）
そう思うのは和彦。

あれから和彦とキジルは路地裏をあとにし、ファミレスに来ていた。

（あの死体は・・・）

あの死体は、あの後キジルの仲間がどこかに運んでいった。

(考えるな考えるな考えるな考えるな考えるな考えるなかんぐ)

実は和彦、キジルがマフィアと知った時に逃げようとしたのだが、

『ここで話すのも何だし、ファミレスで話をしないか？』
と言われてホイホイついて行ってしまったのだ。

(・・・・・・ふっ)

和彦は

(もういい！どうにでもなれ！三人も殺したよ！ふん！スパゲティはまだか！？)

自棄になっていた。あと腹が減っていた。

(あ、でもやっぱり殺されるのはやだなあ・・・どうしよう・・・)
でもやっぱり弱虫^{チキン}だった。

しばらくしてから前菜が届いた。

しかしキジルは手をつけない。
すると和彦もなんとなく手をつけにくくなる。

（た、食べるよ。手がつけにくい……）

しばらくするとキジルが話を切り出した。

「おまえ……クロノスを知ってるか？」

和彦は大真面目にその問いに答えた。

「知らん。」

（何だ？新手のゲーム会社か？俺はガンシューティングしかやらんぞ。）

キジルの頭が華麗に前菜の皿にダイブした。

「ま、まてコラ！ク、クロノスだぞ！秘密結社の……知らないのか！？」

「知らんものは知らん。」

（秘密結社……うさんくさいな、あやしい宗教か？）

キジルは頭痛がしてきた。顔についたレタスをどける。

「と、という事は……な、何も知らないのか？抗争のことも？」

前菜・・・うまい！（後書き）

感想待ってます。

スパゲティ（前書き）

感想待ってます。

スパゲティ

ファミレス

「当時のレミトファミリーはそこそこかいファミリーだったんだ。」

L

(ふん、ふん、当時?)

「あるとき手紙が届いた。差し出し人は書いてなかった。」

（あゝ、あれか？いたずらの手紙？）

「内容は簡素に言うところ、クロノスにシマをよこせ。というものだ」

（簡素すぎる気が……まあいいや……）

「当然いたずらと思ったんだ。」

（ちがうの？あ、スパゲティ来た！わーい！）

ズルズルズルズル

(うまい！うーまーいーぞー！！)

「ところがその二日後、本部の一部が爆発したんだ。」

ガッ
シャ
ー
ン

(ええええええええええ！？きゅ、急展開すぎる！！！)

「当時のボスは前の手紙の出所先をよく調べたら、ある名前が出てきた。」

「ベルゼー!! ロシュフォール。長老会直属の戦闘集団、ナンバーズのトップ?だ。」

「ベル・・・長老会?」

（なんだ?それ?）

「ああ、そういえば信じられんことに知らないんだよな・・・」
（悪かったな・・・扇風機の組み立て方なら知ってるぞ!）

「いいか、クロノスのボス、それが長老会。」

（あれか、魔王みたいなモノか?）

「その直属の戦闘集団、それがナンバーズ。」

（ああ、あれか四天王か! 風とか火とかの!!）

頭の中でFF4のゴルベーザと四天王が出てきた。

「ナンバーズは12人いる。最強の抹殺者^{イレイザー}達だ。」

（×3されてるー!? 4じゃなくて12!? か、数が違いすぎる! ?）

「す、すいません・・・」

「・・・いや、こっちこそ怒鳴ってすまん。」

「だがな、けして俺たちは弱くなかった。負けた原因は一つ。」
キジルはお冷やを飲んだ。

「あいつらは強すぎる。ファミリーの誇る精鋭殺し屋20人がたった一人に瞬殺されたなんて・・・」

和彦は思った。

（一つ質問がある。それは人か？D I。様だったんじゃない？）

「当時のボスも、帰りの途中に乗っていた車ごとボコボコにされていた。」

（ザ・ワールドじゃないの？ん？当時？）

「今のボスは？」

「ボスの息子さ。いい人だ。うん。」

（へー、大変だなあ。その人）

「しかしファミリーは最悪の状態だ。ボスは本部をここに移したが、焼け石に水だ。」

「一ヶ月に1〜2人の割合で仲間が殺されていく。人員がほとんどいない。」

和彦は素直に思った。

（コワイコワイ。）

「しかしその状況も打開される。」

（えっ、なんで！？ わかった！秘密兵器だ。）

「お前がいれば百人力だ。」

（なん・・・・・・・・・・・・・・・・だと・・・・・・・・・・）

ベットと金の魔力（前書き）

感想をお願いします。」

ベットと金の魔力

夜。夜行性の動物や夜型人間が動く時間。

クラウンタウンの夜は危険であまりいいものとは言えない。

その暗い夜、路地裏の影でうごめく男達がいた。

「いいか、奴は必ず護衛とともにここを通る。」

クロスは正面の道路を見ながらキジルの言うことを聞いて拳銃を握りしめた。

拳銃はターゲットにたいして期待通りの威力を示してくれるはずだ。

「護衛は後だ！最初にターゲットを殺せ」

キジルも愛銃を懐から出す。

ターゲットがこの道を通るまで10分前になった。

「いいか！絶対に気付かれるな！」

和彦は壁に張り付き、息を潜めながらこう思った。

（どこで間違えたんだ？）

和彦はこう思った。

（そいそいそいそいそいそいそい！）
時はさかのぼり、ファミレス内部。

（何？何なの？百人力？俺は一人だよ！）
和彦は激怒した、そこそこ。

「どうかウチのファミリーに入ってほしい。この通りだ」
（ああ！？あれか？俺に犯罪者になれと！？ほほう・・・）

（断る！！）
和彦は怒鳴った。心の中で。

（人殺しになれというのか！？ミーに！？じゃない、俺に！？やだ！ やだやだやだやだ！）

だだこねていた。

犬は落ちたスパゲティを食べていた。

（人殺しは駄目と教えられなかったのかぁ！？主に親に！？）

キジルが期待の目をしてこちらを見ている。

（そんな目をしても駄目なもんは駄目だ！）

これが美人の女性なら考えるが、相手はスキンヘッドのオッサンである。

（美人でも駄目だよ！馬鹿野郎ううううううう！！）

どうやら美人でも駄目のようだ。

「どうだ？考えてくれたか？」

（考えたよ！ああ考えたさ！答えはNO！）

和彦はその事を伝えようとした。

ホームレスでも正義の心は失っていないのだ。

「報酬もはずむ」「やらせていただきます！」ほ、本当か？！」

・・・今失ったようだ。

「そ、そういえば名前はなんて言っただ？」

和彦は満面の笑顔で言った。

「高山和彦です」

（誰かレミトファミリーの本部に車で向かって行ってる理由を教えてください。）

「わん？」

和彦は助手席で頭を抱えていた。
犬は後ろを独占していた。

（金の魔力に取り憑かれていた！完全に！馬鹿か俺は！おまけに名前まで教えてしまった！）

（も、もう逃げられん……）

車内では軽快な音楽が流れている。

和彦は頭の中では題名『絶望』という曲が流れる。

（きれいな樹海♪くくれ縄♪ああ絶望♪絶望♪白骨♪っていやだあああああ！）

車はクラウンタウンのビル街に入った。

そのときキジルが言った。

「見えたぞ、本部だ」

「……マンマミーヤ」

（なんじゃこりやあああああああ！！？？）

和彦のしている先にビル街の中でも一際大きいビルが見える。しかもそのビルの窓がいま出来たようにピカピカだ。

（ええ、本部って機織り工場じゃなかったの！？）

和彦が盛大なパニックをしている間に車は進む。

「いや、無理でしょう。」

「なぜですか！？ボス！！」

（ですよねぇ、さすがボス。すばらしい判断にこの和彦、感動いたしました。）

ここは先程見たビルの中。その最上階。

そこは本来なら社長室なのだがその部屋の主人は社長ではなかった。

「いや、だってタカヤマゝカズヒコなんて殺し屋、聞いたことないよ」

そっというのはでかい机に優雅に座っている三十代の渋いオッサン。

彼の名前こそジェームズ・レミト・コールドウェル。

なかなかのイケメンだ。そっちの趣味の人ならイチコロだろう。

「確かに聞いた事ありませんよ。ジパングのデータにもありません」
「しかし！」

そっというのは隣に立っている秘書らしい20代、黒髪の青年。
コリア・モーリスだ。

秘書だけでなく護衛をかねている。なぜか？

ジェイムズ・レミト・コールドウェルがレミトファミリーのボスだからだ。

（いや、マフィアのボスだからもっとゴツイの想像したよ。）
和彦がそう思っている中でキジルは必死に話を続けていた。

「しかし話したとおり、こいつはかなり腕が立ちます！」

「いや、でもまだ子供じゃないか」

「このさい年齢は二の次です！」

「しかしねえ・・・」

（あれ、このままいけば話が無くなるんじゃない・・・さすがボス・・・）

和彦がそう思ったときだ。

「わかりました・・・」

（おや？ハg・・・キジルがあきらめてくれたかな？）

和彦はそう期待した。

しかし事態は最悪の方向に向かっていった。和彦にとって。

「ことw「コリア、アパートの鍵を」

机の上に鍵が置かれた。

「試験日は二日後、それまでウチの管理するアパートにいてくれ」

「試験にはキジルをサポートとしていい。ターゲットのことは後でこっちから送るよ」

「何か質問とかあるかい？」

「無いです」

その後和彦は組織のアパートのベットのせいで何も考えられなくなってしまう。

.....

頭の中のお祭り。

ビル 最上階

ジェイムズは窓から街を見ていた。

「良かったんですか？試験をやらせて
コリアが言う。」

「かまわないよ。彼が本当に腕が立つならね」

ジェイムズは窓から目を離さない。街は様々な明かりで彩っている。

「キジルの言う事もっともだ。ウチには人手が無い。本当に使えるならほしい」

ジェイムズの頭にある風景が蘇った。

父が肉の塊とかがして帰ってきた時のことだ。

「でも相手は小幹部とはいえクロノスですよ？やっぱり無理なんじゃない？」

「・・・・・・コリア」

ジェイムズはコリアの方を向いた。

「無理じゃ困るんだよ。」

(俺はなんでこんな所にいるんでしょう?)

「おらあ！出てこい！」ズキューン

「けっ、腰抜けがあ！」ズドン！ズドン！

「ぎやはははははは！」パーン！パーン！

「死ね！しねえええ！」ズドドドドドドド！

和彦とキジルはすごいピンチだった。
原因は一つ。

一分前

「来たぞ！気を引き締めろ！」

「はくしょん！ー！」

「おい！あそこに誰か隠れているぞ！」

その拳銃は動いていた。

ゆっくりと、しかし周りと比べると格段に早く。

（お、おお！）

拳銃はどうやら右端の奴に狙いを定めたようだ。

（おお！・・・じゃない！駄目だめダメ！！）

銃口の上についた照星を相手の顔に合わせて、

撃った。

ズコオオオオオオオ

（ああああああああああ！！）

銃声は不自然な程引き延ばされていた。

薬莢が飛び出る所まではつきり見えた。

（ダメ・・・）

9mmパラベラム弾はまっすぐな弾道を描き、

（ダメ・・・ダメ・・・）

相手の額に吸い込まれるように、

（ダメダメダメダメダメ！！）

相手の皮膚を突き破り、骨を砕いて、弾丸は脳を超えて外に飛び出た。

ズカン！

一人が後ろ向けにのけぞる。もっともすでに死んでいるので相手は認識できないが。

（あ、あの体勢でヘッドショット！）
しかし神技は後からやってきた。

壁から通りに飛び出したままカズヒコは、さらに撃った。

ズカカアン！！

その音が響いた瞬間、残りの三人も赤い花が咲いていた。

（ク、早撃ち！？し、しかもほぼ3発同時だと！？）
クイックドロウ

倒れ伏す4人。1人を除き、3人は同時に仲良く死んだ。

（ま、間違いねえ！）

キジルはカズヒコが眉一つ動かさないのを見て確信した。

（こ、こいつこそがレミトファミリーの救世主だ！）

そう思った時、近くからエンジン音が聞こえた。

「ササアラァー」

（……………終わったナニモカモ……………）

和彦は脱力していた。びっくりしすぎて呆然としていた。

（……………懲役何年ダローなあ……………）

しかし神は厳しいらしい。

「カズヒコ！あのバイクだ！」

（……………ん？）

通路奥でバイクが走っていく。

「タ・ゲットはあいつだ！こいつらはデコイだ！」

（へえ……………えっ？）

「何してる！追え！不合格になるぞ！」

（いや、もう不合格でいいんだ）

体はそう思わなかったようだ。通路を走る。

（もうやだこの体！誰か交換してくれ！500円で！）

しかし、かなり距離がある。

（むりだよ！あきらめてゲーム終了！）

バイクは先の方にある曲がり角に入るそうだ。

（あれ、待てよ・・・）

和彦の頭に疑念が生まれる。

（試験終了になったらアパートは？）

和彦の頭に今までの二週間が蘇った。同時に、また周りが遅くなった。

銃を持った腕を大きく水平に振る。

メチャメチャな構えで和彦は撃った。

弾丸は見事な曲線カーブを描いていた。

（もうお外は嫌だああああああああああ！！！！）
と言う和彦の思いを乗せて。

（へへっ、ここまでくれば・・・）

男はそう思った。

道路の角を曲がり敵はもう見えないはずだ。

（はっ！俺に追いつくには百年早いんだよ！）

男は後ろを振り向いて必死に追ってくる奴をあざ笑おうとした。

追ってきたのは男じゃなくて弾丸弾丸だった。

（・・・へ？）

それを見た男の周りも遅くなった。

弾丸は自分の方に来る。

（え、ちょっ、そんな馬鹿な事）

すぐく近づいて来て。

（うわああああああああああああああああああああああああああああああ！）

試験合格。

頭の中のお祭り。 (後書き)

感想をお願いします。何でもいいから。マジで。

伝統行事（前書き）

13話・・・見てくれる方ありがとうございます。

伝統行事

アパート。

台所風呂トイレ付き。狭いが立派な家だ。

そのアパートの部屋の真ん中に置かれているソファに青年があぐらをしていた。

正確には考え事をしていた。

（リツリツリッポピタンデー、フフーン♪）
失礼。パニックになっていた。

（回想）

「いやあゝ、驚いたよ」

（だよねえゝ。ぼくがイチバンびっくりしたよ。）

「君ならきつといい仕事をするよ。いやーよかったよかった」
（えーいいシゴトってなに？）

「レミトも安泰だよ」
（なんで？）

「これからよろしく頼むよ。カズヒコ」

(・・・・・・・・コレカラ?)

「終了」

(・・・・・・・・俺はどうせ浮き雲のように人に流されるだけの男だよ・
・・)

あるいは風の前のチリか。

しかし和彦はあることに気付いていた。

(あの弾丸・・・・・・・・)

最後に放った弾丸。外れたと思い絶望しながら通りを曲がると
バイクは横倒しになり、乗っていたターゲットは死んでいた。

(あれは・・・・・・・・曲がったよなあ・・・・・・・・幻覚じゃなくて・
・跳弾じゃなくて・・・・・・・・)

和彦は弾丸が曲がった原因を考えた。物事には順序と原因があるの
だ。

そして原因の方も和彦は検討がついていた。

（原因・・・あれだよ・・・）

自分の趣味たる映画鑑賞とゲーム。その中の一つ。

（ま、間違いなく俺は暗殺者と言う名の犯罪者になってしまったのか！？）

（まさか自分の趣味が人を殺めるなんて・・・し、しかしもう引き返せん・・・）

和彦はもう事故でなく自分の意志で人を殺してしまった。これが意味する所は一つ。

「・・・パリナヤリーナ」

「ワン？」

（俺は・・・つ、ついについに・・・殺^{クズ}人鬼。）

前に置かれてるテレビで子ども向けの番組がやっている。

『さあ！よい子悪い子クズの子頭にウジのわいた子！にこにこ体操始まるよー！』

テレビの中では胃液の逆流しそうな体操のせいで子供達が悲鳴を上げる。

それを見ながら和彦はある記憶を思い出した。一種の白昼夢だ。中学の頃である。

夏の熱い日 気のいい友人達と映画を見に行った時、カラオケのうまい友人が言ったのだ。

『後はどうでもいいから、誰かあのクソ太陽を壊せ！金やるから！』

(・・・。。。。。。それだ、それだよ！)
和彦は思った。

(もう今さえよければそれでいい！ありだよ！ありだよ！！)
寝場所のついた今と昔を思い出す和彦。

犬はテレビの中の子供達に哀れみの目を向けた。
野生から見ても子供達は生命としての危機を迎えていた。

『あれ？・・・あ、やばい・・・誰かタンカー！』

和彦は決心した。

(もうどうとでもなあれ！)

「ぎゃあああああ！死ぬううううううう！」
響く絶叫。

（あああああああ！俺が刺しましたああああ！御免なさいいいいいい！）
響かない心の絶叫。

夜のクラウンタウン。どこかの路地裏。

男の悲鳴が響き渡る。

「まつ、待ってくれ！助けてくれえ！」
そう言うのは今回のターゲット。

「てめえが今までしてきた事を考えれば当然のことだろ」
そう言うのはキジル。

（ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい）
ショックで無表情なのは和彦。

路地裏でたばこを吸っていた男達をベレッタで後ろから撃つたのだ。
外道の行動だが残念な事にレミトもクロノスもこの程度のことは朝飯前なのだ。
ちなみターゲットも下っ端幹部とはいえ幹部なので護衛がいたのだ
が・・・

（回想）

男の前に立つ。

右足で相手のヒザを蹴る。嫌な音とともにヒザは本来曲がってはいけない方向へ曲がる。

（うわああああああ！医者ああああ！誰かああああ！！！！）
そう思うのは蹴った張本人、お前が言うな。

思いながら右手に持ったナイフで相手の腹を刺す。
手に嫌な感触が広がる。

刺さったまま相手を壁として活用。奥様もびつくりの活用法だ。

「な、なんだ！？」

「野郎！幹部を盾に！？」

（いやああああああキジルとめてえ！！！！）

そのキジルはサポートと名ばかりにこちらの手並みを拝見している。

そのまま左手の銃を構えて奥にいる三人を見る。三人の相手は壁のせいで撃てない。

「てめえ何も」

（みんな逃げろおおおお！俺から！俺からああああ！！）

ズドン！ズドン！ズドン！

（終了）

「待ってくれ！た、頼む！」

「ダメだ。ここをどこのシマだと思ってやがる」

男はキジルに説得も懇願も無駄だと知ったのか和彦のほうを向いた。腹からは相変わらず血が流れていて水溜まりが出来ていた。

（あああああ子供の頃よく遊んだよ水たまりあああああ）

違いは空からではなく人体から噴き出るなどだ。

「あ、あんた頼む！俺には3歳の娘が……」

（こ、子持ち！？ああああもうダメだ消えぬ憎しみの連鎖……）

よく見ればこのおっさんの頭が円ハゲなもの、小さい我が子に仕事を隠すために

苦労してそうなったのかもしれない。

（そ、そうなたら俺はその娘に殺され「死ね！」ってえええええええええ）

ズガン！

頭に十円ハゲならぬ十円型銃創ができたおっさん。

「いやあゝ今回も世話になったな！」

「・・・・・・それほどでも」

「ハハハハ！謙虚だな！さすがジパング出身！」

（じゃねええええええええええ！名にやつ天のお！？じゃない！何やってんの！？そんな事したらこの

ハゲの娘のキャサリン（仮名）が復讐にやって来るぞ！いいのか！

？ ダメだ！）

そう思う和彦。

しかし和彦はこの業界をなめていた。わかってなかった。

「キ、キジルこの人娘がいたんじゃ・・・」

「は？・・・ああ、そんなこと言ってたな」

キジルが思い出したように言う。

「安心しろ。たぶん伝統行事だ」

（・・・・・・は？）

「いこうぜ。お前の鮮やかな手並みに免じてメシおごってやるよ」

和彦はしばらく言葉の意味を考えたが。
(マジで！？パスタがいいなあ！！)

すぐ忘れた。忘れるのは人の良いところでもあり悪いところでもある。

伝統行事の意味はすぐにわかった。

「待て。私には7歳の息子が・・・」

・・・ズガン

「私には3歳の娘が帰りを待ってるんだ！助けてくれ！」

・・・ズガン

「4歳の娘が・・・誕生日なんだ・・・」

・・・ズガン

「死んだ息子の命日で」

・・・ズガン

「お前ジパングだろ！俺のじいさんもジパング出身なんだ！助けてくれ！」

ズガン

「待て！俺はお前の生き別れの兄だ」

ズガン！

「娘の入学式d」

ズガン！ズガン！

「死んだ母n」

ズガン！ズガン！ズガン！

「待て！俺はお前の生き別れの弟d」

ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！

「いいのか？俺は500年の歴史を誇る暗殺拳法・無双流の使い手n」

ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！

歩く和彦。

アパートの鍵をだして扉を開ける。

玄関では犬が尻尾を振って迎えた。

そのまま居間のソファに一直線。倒れ込んだ。

「・・・無双流ってなんだ」

知らん。

伝統行事（後書き）

ご感想お待ちしております。

銃が無いならナイフを使えばいいじゃない！

街角の酒場。

そこは本来騒がしい場所だがそこは寂れている。

人曰く、開いてる所を見たことがない。

店にとってゆゆしき事態だがこの主人は気にしていなかった。
なぜなら酒場じゃないから。

「おらあ！組み立て方の1から10までちがうぞ！」

「ハイ！」

ここは酒場『モーロックス』。違法銃砲店だ。

（くそ、キジルに騙された・・・何が買物だ・・・）

和彦はバーの机に向かって銃を組み立てていた。
今日の朝、キジルがアパートに来て言ったのだ。

『買い物しようぜ。』
ついて行って、それでこの様だ。

（何が悲しくてこんなことを・・・）
銃の組み立てはもちろん初めてだ。

（くそ！扇風機なら出来るのに！）
どうやら扇風機の方が詳しいらしい。

「ちがう！お前は暴発させる天才か！？ここだ！ここがちがう！震えるな！」

そう言うのはこの店主であるトッド。
アラブ系の顔立ちに髪型はモヒカン。体中の青い刺青がトレードマークだ。

（くそーーーー！お前のモヒカンのせいだろ！インパクト強すぎるんだよ！見たことないよ！）

このトッドがのぞいてくる度に笑って手元が狂うのだ。

考えてほしい、人生初の銃の組み立てで刺青モヒカン男がこちらを時折見てくる。

インパクト強すぎだ。

（くやしい！でも手元が狂う！くそ、くそくそくそ！お、俺のそばによるなああああ！！！！）

連れてきた犬は出されたドックフードを食べていた。キジルが頭をなでる。

「よしよし、ジョン。よく食うなあ」

（ジョンって何！？）

キジルがつけた名前らしい。犬は無視してドックフードを食う。

大人の対応だ。

（そ、そういえばこいつ、近所のおばちゃんにマリオ！子供にぽち！店員にクラストー！こ、この犬！いくつ名前を！？）

どうやら犬の方が和彦より処世術が上らしい。

「おい！人の話聞け！」

「ハイ！」

（こ、コワイよおおおおお！モヒカン怖い！あ、やb）

ズドオオオン！

とりあえず恐怖だけ叩き込まれたようだ。

店の地下一階

ここは射撃場。買い物した商品を試すところだ。

和彦は手の銃を握りしめる。

撃つのが目的だ。しかし和彦は少しだけ目的が違った。

（ふ、ふふふふふふふふふ。）

（今まで好き勝手やってくれたなあ！おれ！じゃない、体！）

（今までは抵抗のても出なかった！しかしだ！今日の和彦くんは違うはず！）

どうやら違うはずらしい。何かが。

（今日という今日はお前を完全制御する！はず、だ……たぶん）
パーフェクトコントロール
完全制御するようだ。

三つの的が障害物の下から機械音とともに出てくる。

ウィイイイイン

（来た！）

和彦は手に力を込める。

（撃たない！曲げない！当てない！この三原則を俺は守る）

ズガガン！

三つ出てきた的はすべて同時にど真ん中にぶち当たった。
まさに神業。　しかしやった当人は不幸のどん底にいた。

（父さん、俺・・・いつの間にか人どころか自分さえ理解出来なくなっていたよ・・・）

「・・・すげえ・・・」
「だろ？」

和彦の後ろ、少し離れた所ではガラスを挟んでキジルとトッドが話をしていた。

ガラス越しに見てもその早撃ちは常人離れしていた。

「銃の分解も出来ないガキだと思ったんだが・・・」

「うちのエースだぜ。やるときはやるのさ」
(もうやだあああああああ!)

そのエースは半泣きしながら出てくる的を撃っていた。全部と真ん中に命中させている。

「・・・わかった。賭けは守る、何が聞きたい？」
「そうこなくちな」

実はトッドは副業で情報屋もやっている。
どうやらこの二人、和彦を賭博のサイコロ、情報を賭け金の代わりにしていたようだ。

哀れな和彦である。

「実は最近のクロノスについて教えてほしい」
「おいおい、シマはほとんど取り返したんだろう？」

あれからレミトはシマの73%を取り返していた。
ファミリーの人間も増えてきている。昔に戻りつつあった。

原因は主に和彦の体のおかげで。 哀れ和彦。
彼は知らぬ内にこの街の犯罪率を増長させていた。

「・・・うちのエースはすごい。だが天下の秘密結社クロノス様が
ここまで暴れて無反応だ」
「・・・何がいいたい？」

「おかしいだろ！？ボスとレミトの精鋭を殺したクロノスが！無反応だぞ！？いくらなんでも！もう弱小幹部じゃ歯が立たないくらいもう分かってるだろ！」

「……………で？」

「俺は内部で何か起きてるんじゃないかと思ってる」

「教えるのはそれか？」

「ああ」

「……………わかった、選択の余地はない。賭けで負けたからな」
トッドは嫌そうに口を開いた。

（やった！弾切れだ！体の主導権は俺に返る！）
和彦は弾切れをいいことに体から主導権を奪おうとした。

ナンバーズ
「番人のXが殺されたそうだ」

「こ、殺された！？だ、誰にだ！？」

「たぶんだが……………裏切り者にだ」

キジルは絶句していた。

ナンバーズのXは知らないが番人はそれぞれが最強だ。
おまけにやったのは裏切りもの。

「ク、クロノスを裏切る……………」
「わかった、ウソだろ？」

「ちがう！シヨツクなのはわかるが現実を見る！…………まあ気持ち
ちはわかるが……………」

とにかく、と続けるトツド。

「今クロノスはヤバイ。前はN O・X I E E I が抜けたしな。身内で
大変なのさ……………」

「そ、それでか……………」

つまりクロノスは内部が大変で周りの羽虫^{レミト}に手が届かないらしい。

「…………まあ、それならそれでいいさ」

キジルは考え直した。

（内部でイザコザが起きているのなら結構。うちのエースがいりや
あ百人力だ。）

キジルは波^{ウェーブ}が来ていると思った。幸運の波^{ウェーブ}だ。

（このままいけば反撃も夢じゃねえ！エースが！カズヒコがいれば
！）

キジルはカズヒコを見た。期待のエースである。

期待のエースは

弾切れの銃を捨てて

ナイフで的に向かっていた。

（僕、これから、弾切れ起こさないよ・・・だから誰かとめてええええええええええ）

パーフェクトコントロール
完全制御が聞いてあきれるエースだ。

そして幸運の波は怪物が紛れていた。
ウェーブ

銃が無いならナイフを使えばいいじゃない！（後書き）

次回、ついにナンバーズとバトル・・・かも・・・

時間軸はトレインが裏切って半月くらい。トレインでくるのはいいつやら・・・

それまで皆さんよろしくお願いします。

感想待ってます。

廃工場で遊びたい。

『ああ〜♪ドラツニカ〜♪共和国〜♪』

ここはキジルの愛車の中。

上の歌は車内で流れている『万歳！ドラツニカ共和国 of people』だ。

（一つだけ言えるのはここの人達に音楽性という言葉は無いな。）

「いつ聞いても良い曲だなあ、これ」

（正気かキジル？マイケルー！俺だー！ここに来て真の音楽を教えしてくれー！頼むー！）

和彦は耳を押さえると窓に目を向けた。

外は民家の少ない田園を延々と走っていた。別に田園地帯が好きなわけではない。

昔友人に田んぼに叩き込まれたのがなつかしい。原因は借りたDV Dを割った。

ちよつと過去の本部ビル

「ほんとか！？」

言ったのはキジル。

「確かな情報です」

コリアが言う。

ジエイムズは信頼の目でこちらを見ている。

「この作戦が成功すれば晴れてレミトの反撃の狼煙だ。必ず成功させてくれ二人共」

「まかせてくれボス！今度はこちらから攻める番だ！ん、どうした？カズヒコ」

「・・・キング・クリムゾン・・・」

「？　なんだい？それ？」

なぜかスタンド名をつぶやく和彦。

（ボス・・・信じてたのに・・・どう見ても罠でしょう・・・これ・・・）

「ああ、でも一応増員を用意しようか。やっぱり罠っぽいしね。これ」

（ボス愛してる・・・あ、敬愛の方だね。）

わかりました、と言うコリアに期待を込める和彦。

（もうすごいと呼んでくれ！『WANTED』のクロスみたいなもの！）

「では先行部隊で15名ほど。キジルさんは現地で合流して彼らの指示を」

（おお！意外に多い！これなら俺の体が動かないで済むかも！）
密かに期待する和彦。

「キジル、カズヒコ。これは『チャンス』だ。でも『罠』かもしれない。罠なら逃げておかまわない」

「はっ！罠なら返り討ちにしてやりますよ！なあカズヒコ！」

「・・・ああ」

（・・・いざとなったら逃げよう）

ジェイムズは真面目な顔をして二人を見た。

「これだけは約束してくれ。『生きて返る事』と『死なない事』」

「ボス・・・」

キジルは感動した。

（ボス・・・あなたは・・・もう先代を超えてるよ・・・）

和彦は真面目に思った。

（それ結局同じ事じゃん・・・）

「着いたぞ。カズヒコ」

（うわぁ不気味・・・昼に行ったのにもう夕日が・・・誰だ！近く
の廃工場なんて言ったのは！！）

廃工場は夕日の赤とサビがあるため余計赤く見えた。

「おかしいな、先行部隊がいるはずなんだが」
キジルは周りを見渡すが人の気配がしない。音も、気配も、人影も見えないし感じられない。

「もう殺して帰っちまったか？それならそれでいいんだが・・・」
（よくないよくない人殺しダメ。てかほんと不気味だなあ。結構でかいし広いし）

しばらく車の近くで立っていた二人。しかしキジルがしびれを切らした。

「しょうがない。少し探して見つからないならボスに連絡してみよう」

「わかった」

（えーかえろうよ……。なんて言えないな）

キジルは右のでかい建物を指さす。

「お前はあっちを。俺はこっちを探してみる」

「ハイ」

（まあでもないなら失敗でいいや）

殺し屋にあるまじき考えを抱きながら体育館のような建物に入る。入り口のでかいシャッターは開いていた。

中は広く、等間隔で大きい柱がある。ただ床も天井も柱もサビがついてるが。

かなり前から使われてないのだろう。疲労した年月を感じる。

（重機を入れるところかな？よく知らんけど）

近くに寄って柱に触れてみる。

（ぐうわあああああああ！この日の為にもらった黒スーツ黒手袋
セツトにサビ色がつく！）

すぐに手をはなす。それが良かった。

柱は裏側の誰かによって真横に斬られた。和彦の手袋をかすめて。

「良い反応だ」

和彦の体は素早い反応した。後ろにバックステップで飛んで着地。
すぐにベルトの左右に挟んだ拳銃を両手で抜いて前に構える。一瞬
の行動。

ズドオオン！

斬られた柱が落ちる。天井から粉雪のようにサビが降ってくる。

「だがそうでなければ私が出てきた意味がない」

斬られた柱から人が出てきた。

黒いコートを着こなす外人特有の金髪。顔の渋い男。身長もでかい。目測でも185はある。

体は筋肉質で、左手の甲にIIの刺青。

「全ては世界の安定の為。お前とお前の組織には死んでもらう」

その男は手に黒い青龍偃月刀が握られていた。どうやらこれで斬ったようだ。

太い柱を。たった一人で。

「私はベルゼー。ナンバーズのIIのベルゼー」ロシュフォールだ」

和彦はそれを見て

気絶してた。

廃工場で遊びたい。(後書き)

感想まっています。

預金残高はいっぱい！

「驚くくらい何もねえな」

キジルは工場跡に立っていた。別にただ立っていた訳ではない。ちゃんと探した結果である。結果は何もない。何もいない。

「この分じゃカズヒコの方も期待できないな。しょうがない、コリアに連絡を・・・」

キジルはその場を立ち去ろうとしたとき、

ズドオオン！

「！？ 何の音だ！？」

見ればカズヒコの行った方向に音が出ていた。

「カ、カズヒコの行った方向！？ま、まさかこれは！」

キジルはある考えに行き着いた。正確に言つと和彦の考えに。

「わ、罨！？」

和彦の代わりに言おう。 最初から気づけよ。

倉庫 内部

（動きがない……冷静だ。さすがプロと言っただけある）
ベルゼーは思う。目の前の相手は一切動きがない。構えた拳銃にわずかな震えも感じられない。

（やはり私が出てきて良かった……いたずらに部下を死なせる所だった）

クロノスの幹部を囷にレミトファミリーの殺し屋を引きずり出す今回の作戦。

本来ならこの作戦はベルゼーの部下達がやるはずだった。

しかし他ならぬベルゼー本人の強い要望で作戦を変更したのだ。
なぜならば、ベルゼーは標的のデータを見て気づいたのだ。
今まで死んだ幹部は全員頭を撃たれ即死だということに。

（しかし……）

ベルゼーは思う。

（これは……）

ベルゼーはすでに相手の異常性に気づいていた。

（ありえないことだが……殺気がない）

本来な戦いに必ず出るもの、殺気。

相手を殺す時に必ず出る殺気は、ある程度押さえる事は出来る。達人の暗殺者ならほとんど感知できない。ただしベルゼーは殺し屋最強の集団クロノ・ナンバーズ。

その中のNo.Ⅰたるベルゼーが殺気を感じできないワケがない。しかし現実はず違った。

（やはり殺気がない。・・・ならば！！）

目の前の相手は一切殺気がない。ベルゼーはある行動に出た。

ピシッ！

突然倒れた柱にヒビが入る。原因は高濃度の殺気。

ベルゼーは視線に殺気を乗せて放ったのだ。石にヒビを入れる程の殺気を受けた相手は、

恐るべき事にまったく動きが無かった。銃口に震えさえ無い。

（これは・・・）

ベルゼーは静かに、しかし確実に思った。

(・・・・激戦になりそうだな)

(・・・はっ！・・・ゆ、夢じゃなかった・・・石柱から・・・かぐや姫ならぬ金髪の関羽が 出てきたのは・・・夢じゃないのか！なんてこったい！)

その特大の殺気を受けて和彦はやっと目が覚めた。最悪の目覚ましだ。

そして目の前のおっさんが青龍刀を構えてるのを見て、
(なんてこった！こいつが！クロノスのナンバーズ！？ほ、本物！？)

よく見れば青龍刀の黒い刃に？の刻印が刻まれている。

(本物！？なんだ、関羽じゃなかったのか。・・・じゃない！ピンチ！俺ピンチ！)

(？てことは12人いる中で2番目に強いってことじゃん！勝てない！無理無理！なんでよりによって2番がくるの！？なんで！？12番からだろ！普通！)

原因は一つ。カスビコ体のせい。

（信じるな！俺を信じるなよおおおおお！）

（くそ！だから罠だといったじゃないか！クソクソ！どうしよう！
？零距离土下座！？）

ベルゼーの方を向くとそこは誰も居なかった。

（な！？き、消えた！？）

瞬間、心臓の鼓動が早くなる。周りが遅くなる合図。そして和彦が
ロクな事にならない合図でもある。

（ど、どこ！？どこなんだ！？テレポ―ト！？超能力者テレポーターなのエネゴ
りくん！？）

目玉だけ動かすが周りには居ない。

（ん？これは？）

視線の先は床。床には黒い影があった。

（透明人間！？じゃない！ハートレス！？じゃなくて！上か！！）

目玉をゆっくりと上に向ければ、宙に両手に武器を振りかぶるベル
ゼーが。

（な、何メートルジャンプしたんだ！？すごい脚力！！しかし！し
かしだ！）

和彦の体も負けてはいられない。

今度は銃を構えるだけでなく、撃った。

ズガガガアアアアアン

ゆっくりと撃ち出される弾丸。落ちる葉莢。伸びる発射音。
2発の弾丸はベルゼーに向かって行く。

（はははははは！どうだ！これが本人もコントロールできない動き！……ぐすん）

弾丸は宙にいるベルゼーに向かう。

（ああ、また罪を……きつと銀行の預金残高を見てニヤニヤしたバツだ……あれ？）

和彦は驚いた。弾丸の事じゃないし自分の体でもない。体は今更だ。

青龍刀を持ったベルゼーの方だ。正確に言うと握ってる青龍刀の方。

本来なら縦に和彦を真つ二つにするはずだった青龍刀。それが斜めつていく。

（う~~~~~ん？なんで？斜め？）

持っていた武器の方向が変わる。縦が斜めになるのである。

（なんで斜め？）

答えはすぐわかった。

ベルゼーは向かってくる弾丸を斬るために斜めにしたのだ。

飛び上がったままの姿勢で、迫る二つの弾丸を。

「ドラツニカ共和国万歳」
（・・・・・・・・・・・・・・・・え、関羽？）

預金残高はいっぱい！（後書き）

感想待ってます。

ソーランソーラン！（前書き）

テスト期間なのにやったよ・・・疲れたアル。

ソーランソーラン！

（うおおおおおおおおおおおお！！！！）
体をひねる。躲す。しゃがむ。時々雨、ではなくジャンプ。

さんざん躲したにもかかわらずに繰り出される突きは空間を裂いていく。

躲すばかりが能ではない。突き出される刃を銃で払う。逸らす。鋼鉄と鋼鉄らしきものがぶつかり合う音が倉庫に響く。

（ス、スロウ病のはず！な、なのに！）
和彦は思う。

次々に繰り出される斬撃はゆっくりの世界で異常と言われるほど早かった。

（こ、これが関羽の・・・じゃなくて！ナンバーズのIIの実力！早い！）
時間の遅い世界の中、普通より少し速い速度で繰り出される突き。しかし、これは和彦の主観だ。仮にこれを普通の人が見たとしてたら二人の腕や武器が高速でぶれてるようにしか見えないだろう。

右手めがけて繰り出された突きを払う。しかし次々来る『早い』斬撃にきりがない。

和彦に体はアドレナリンを自在に放出する。

アドレナリンは血中に放出されると心拍数や血圧を上げる作用などがある。

つまり、これにより運動力を底上げし、『異常集中力』で頭の中に『時間の遅い世界』を作り上げる。これによって和彦はベルゼーの『速い』が『早い』で済んでるのだ。

（おのれえベルゼー！所詮近接武器のくせに！こっちは銃だよ！エヘン！）

そんなことなど露知らず。和彦は足下にきた斬撃をジャンプで避ける。

（くそ！やってやる！やるぞ！このまま死ぬのはやだ！モンブランをまた食うまで死ねんだ！ああそうだ！地獄にケーキは無い！・・・はず、だよな・・・？）

（そ、そうだ！『Wanted』のクロスは銃で交響曲を奏でたじやないか！俺もやってやる！やるとも！）

和彦の胸に微量の、本当に微量の殺気が含まれる。重さにして0・0001程だが。

彼が奏でるのは鎮魂歌^{レクイエム}か。それとも激しいロックか。

（ソーラン節を奏でてやる！）
失礼。北海道渡島半島の民謡でニシン漁の歌だった。

（ほう、来るか・・・隠しきれない殺気が見えるぞ・・・）
一旦距離をとるベルゼー。

彼は和彦の微量の殺気をすでに感じていた。ただそれが全力なのだが。

（あの異常な反応速度で繰り出される銃撃、N O ・ X I I I I にも劣らんだろう。しかし！）

斬撃を止め、青龍刀を構え直す。

（クロノスのため、世界のために必ず死んでもらう！）

和彦のように邪念^{ケイキ}の無い純粹な殺気は、異常なまでに濃かった。

倉庫の戦闘音が止む。和彦はベルゼーを睨む。睨み返される。

（ごめんなさいiiiiiiii！やっぱ怖い！無理かも！無理だよ！うん！）

打って変わって音が一切ない倉庫。睨み合う二人の男の殺気だけが交差する。

（・・・怖い先生が来た教室みたいだなあ・・・）
のんきに思う和彦。しかし体は違う。一切気を抜かない。

（ここへきて自然体か。これは手強い・・・）
それを見てますます手に力を込めるベルゼー。
（一歩間違えれば死ぬのは私だな・・・）

そのとき、柱から大きいコンクリートの固まりが落ちた。地面に。
ゆっくりと落ちる。
ぶつかる固まり。音が鳴る。

カンッ！

和彦の持つ銃。ベルゼーの持つ青龍刀。
銃が弾をはき出すのと青龍刀が繰り出されるのはほぼ同時だった。

「ハアアアアアアアア！！！」
（ギャアアアアアアアア！！！ごめんなさいiiiiiiii！）

弾と青龍刀がぶつかり合う空間（戦場）がそこにあった。約一名が
心の中で悲鳴を上げていたが。

（ダメだあ！勝てる気がしない！無理だあ！もう無理！）

あれからわずか1分後。決着はつかない。

なにせ和彦の『体』を持ってしてもベルゼーは異常ありえないなのだ。

撃った弾丸は斬られ、弾かれ、避けられる。

おまけに

「ハアツ！！！」

（うわ！来た！）

目の前に居たはずのベルゼーが消える。彼が居た床にはヒビが入っていた。

（どっちだ！？上？右？左？下？・・・左だ！！！）

思いつきり青龍刀を両手で振りかぶるベルゼーを横目で捉える和彦。

（そおい！マトリックス避け！！）

後ろに反り返る和彦の上半身。骨と肉を斬る刃はかわりに空を切る。通り抜ける刃には？の刻印が刃の黒い表面に刻まれていた。

爆発的脚力による瞬発力。これによってたびたび見失うベルゼー。

しかし攻撃は避けた。

（はははははは！見たかね！これが「ズガアアン！」えっ、何！？）

後ろ見れば少し離れた柱に決して浅く無い傷が付いていた。

あまりに強すぎる斬撃で『かまいたち』を起こしたのだろう。もちろん和彦は自力でそんなことする人を見たことがない。そんな人に会いたくもない。

和彦は柱に自分を重ねて見た。カルシウムベースの骨と皮下組織全

般が斬られるだろう。

(・・・・・・・・)

そんな思いをよそに銃を撃ちまくる体。空飛ぶ薬莢。突き進む弾丸。しかしベルゼーの体を突き進むまもなく黒い青龍刀の柄に弾かれる。目まぐるしく回る青龍刀。

和彦が目を回す前に裂帛の気合いの声とともに突き出される刃。

「シッ!!」

(そいそおい!)

銃の台尻で弾き、剣線をずらす。周りに響く鋼鉄の音。突きは和彦の脇にそれた。

(あれ? あつ、や、やばい。)

そのとき和彦は相手のスピードが上がっているのに気づいた。正確にいうと気づかされた。

(は、『速く』なっていない? なんか?)

和彦はそう思った。

それもそのはず、今までの相手は『^{ターゲット}行って、撃って、帰る』。負の三拍子だ。

ところが今回は相手が違い過ぎる。例えるならカエルと毒蛇だ。仮に、子供がカエルを捕まえるのと毒蛇を捕まえるのでは違う。それくらいの差がある。

アドレナリンが切れていく。

(ま、まずいぞ・・・お、おまけにこ、呼吸が苦しい・・・)
これも違いの一つだ。鍛えてある真面目ベルゼー。アドレナリンに

よるドーピング和彦。

スタミナによる圧倒的差。しかしここで和彦は自分の間抜けさを見る。

カチン

（あ。）

今あまり聞きたくない音。弾切れの音である。

勘違いしないでほしいがまだ弾はポケットにある。距離をとって弾を込めるのも何とか出来る。ではどういことか？その後の事だ。

弾が切れた後は？ナイフで『かまいたち』を起こし、瞬間移動する人間に近接戦で勝てるか？

答えは

（無駄無駄むだmじゃなくて！無理無理無理無理無理無理無理！！）

応援も期待できない。ここに来るまでは時間がかかるのは身をもつて実証されてる。

キジルは？というところも期待できない。彼のハンドガンでシャッターを開けられるだろうか？

（おわったね。なんで弾をもつと持ってこないんだ俺え！馬鹿馬鹿！死んじゃえ！）

和彦は絶望した。絶望するついでに斬撃を右に避ける。一応死にたくないらしい。

しかし幸運の女神は彼を見放してなかった。

（・・・・・・・・あれ？）

和彦は

（もしかして）

ベルゼーの

（もしかしてもしかして！）

おそらく致命的弱点であろう所を見つけた。

（ソーランソーラン！ハイハイ！）

頭の中で歓喜のソーラン節が響いた。

ソーランソーラン！（後書き）

感想待ってますヨ。

バーニングヘルゼーアタック

目の前の相手に向かって銃を構える、狙う、撃つ。

これが銃の一般的であろう撃ち方だ。撃てば弾丸はまっすぐ飛んでいく。

狙いをつけた相手に向かって。

和彦は考えた。ベルゼーははっきり言って異常だ。そしてプロだ。関羽だ。

戦闘経験も半端ない。ここで少年漫画的に不思議パワーに目覚めればまだしも、残念なことにそれは叶わないだろう。

（母さん、俺元気だよ・・・じゃなくて！）

ちなみに目の前は変わらず、死神^{ベルゼー}関羽と死闘を繰り広げている。主に体が。元の世界に帰りたいのは山々だがここで現実逃避しているヒマも、余裕もない。

（この方法はいけるのか！？）

和彦は頭を悩ませた。この方法は百戦錬磨の関羽^{ベルゼー}に効くだろうか。

和彦の考えた方法、それは弾丸^{バレットカーブ}曲げだ。

別に曲げればどうにかなると言うわけではない。理由はこうだ。

ベルゼーは戦闘経験豊富、百戦錬磨、超人関羽。しかし生まれながらにこうではないはずだ。

（だよね？最初から関羽じゃないよね？最初は違うよね？ね？人・・
・だよね？）

おそらくこの腕前になるまで相当な戦闘数をこなしてきたはずだ。アドレナリンのマジックが効かなくなる程の戦闘数。その中には当然自分のような拳銃使いが何人かいるはず。

（その何人かの人達はきつとみんな過去形だ・・・・）

そして戦いで学んだはずだ。すなわち、拳銃にたいしての戦い方。心構えに始まりどうすれば避けられるか、どうすれば射程範囲から逃れる事ができるのか。どうすれば弾丸が斬れるのか。

（「ビュン！！」あぶねえ！タンマタンマ作戦タイーーム！）

そして弾丸が絶対に真っ直ぐしか飛ばない事も。

（弾丸を曲げれば！もしかしたらあの黒い槍のガードを乗り越えて！倒せるかも！）

つまり 撃ちまくる↓ベルゼーガード↓バレットカーブ弾丸曲げ↓「ちょwww無理www」↓WIN！

（我ながらなんて単純な……）

まあ元平凡現代大学生が考える作戦である。しかし単純ゆえに良い作戦かも知れない。ベルゼーもまさか相手の撃つ弾が曲がるなんて思っ
てないだろう。そして長い戦闘人生でも弾丸を曲げる人はいな
かったに違いない。

戦闘経験豊富ゆえの固定概念という名の弱点。しかしこの作戦には
欠点がある。

（絶対に1発ではれる、2発目はきつと「見切った!」とか言われ
るに違いない……）

この作戦、ばれたらもうおしまいである。きつとベルゼーに同じ技
は効かないだろう。

（うわ「ブン!」ちょっと「ヒュン!」マイケル!「スパン!」かす
った!）

しかも問題はまだある。自分は弾丸曲げバレットカーブを出来るのか? 出来たの
は今まで最初の一回と二回だけ。どうもこの技、体があまり使いた
がらないのだ。

出来たとしても今、もし体を自分で制御したならば自分で避けられ
ないだろう。

（あれ?なんか体が痛むようn「ズドドドドド!」あわわわわわ
わわ!?速い!?!?）

黒槍の突きの連打ラッシュを必死に避ける。先ほどと違い『速い』のはアド
レナリンの限界だ。疲労も原因だろう。気づけば肩や脇腹にかす
り傷が出来ていた。

（い、いつの間に！？）

気づいた瞬間に傷が痛み出すのは全国共通のようだ。じんわりスーッにじむ血の赤。

「どうした？遅くなってるぞ？」

「・・・運動不足さ」

（くそ！よい子のニコニコ体操やっとなら良かった！生きれたら筋トレしよう！筋トレ！）

考える時間はないようだ。和彦は帰れたらほとんど軍隊スパルタニコニコ体操をやるうと決めた。

昔なら見ただけで疲れただろう。恐るべきは人間の適応能力。ケーキ付きだが。

（体ー！俺だー！曲げてくれー！）

これしかない。自分の体をお願い。これしか方法が思い浮かばない。頭に流れるソーラン節を信じよう。

倉庫にはむなしく鋼鉄の戦闘音が響くだけだった。

（ダメか・・・終わったマイ人生・・・まさか自分の体にシカトさ

れるとは・・・)

このままスタミナ切れでコマギレサヨナラアキハバラーされてしま
うのか。その時だった。

このままいけば勝てる。

ベルゼーは今までの経験からそう考えた。目の前の相手が弱ってい
るのがわかる。

(早めに殺さねばなるまい)

外のもう一人を忘れたワケではない。援軍を呼んだとしてもまだ時
間がかかるだろう。

シャッターの閉まった入り口から銃砲が聞こえてもベルゼーは冷静
だった。銃では無理だろう。

すでに相手は自分の槍撃を所々受けている。銃の弾数もあまりない
だろう。その全てを計算してやったのだから当然だ。逃げ場もない
だろう。データからここに穴を開けるほどの武器はない。

全て順調。そう思った時だ。

(なに・・・?)

なんと目の前の標的が逃げた。突然背を向けて走りだす。

（逃げる気か？）

しかし、ここに逃げ道はない。相手が生きられる未来も。

「どこへ行く気だ？」

「……」

（ミーが聞きたいYO！）

相手は無言のまま近くの柱の裏へ。ベルゼーは疑問に思いながら追う。

柱を挟んで向かい合う二人。ベルゼーはさらなる疑問を抱く。

「何故ここに？」

「……」

（何故ハシラのウラー？なんでー？）

ベルゼーの青龍刀はこの程度の柱を貫通する。相手も分かってるはずだ。

（何か策があるのか？）

この柱を弾丸で貫通させるのは無理だろう。圧倒的に自分の槍が有利。

問題は何故ここに相手が自分を連れてきたか。

（何を考えてる……？）

（和彦の考え）

（どうして俺ここにいるんだろう？）

（……いいだろう。どのような策があろうが叩き潰すのみ！）

持っている槍を強く握り、構える。眼前の柱を強く睨む。

そのときのベルゼーからは恐ろしい程の殺気と闘気が滲み出ていた。

（な、何じゃありやーーーーー！）

和彦は生まれて初めてオーラを見た。柱の向こうから燃え上がる火炎のような闘気だ。

和彦でも見れる程の濃密な闘気は柱の両側から燃えさかっていた。

（ベルゼーさん火事だーーーー！！柱の向こうは絶対火事ーーーー
！消防車ーーーー！）

和彦には柱の向こうのベルゼーが人体発火したと思った。

（いや、待て待て！人体発火じゃなくて！）

和彦は考える。さすがに人体発火は無い。

（必殺技だ！そうに違いない！）

和彦の頭に火の鳥と化したベルゼーが自分に突っ込む映像が鮮明に映った。

（ピ、ピ、ピ、ピンチーーーー！？どうする！？どうすんのオレ

（の体）！？

（・・・受ける我が槍）

（ん！？なぜか寒気が！？何奴！？じゃなくて何！？）

柱からかなり不吉な雰囲気が漂う。

柱の向こうでは死神の鎌の一振りに相当する突きが繰り出されようとした。

周りの空気が異常に震えていた。

（い、いかん！『バーニングベルゼーアタック』だ！！絶対そうだし！）

和彦はベルゼーが柱の向こうで必殺技をするベルゼーを想像した。

和彦の手が二丁の拳銃を強く握った。

（えっ、今柱から飛び出したら燃えカスに・・・はっ！そうか！そうなのか！）

和彦は自分の体が何をしたいか分かったようだ。

（こっちも 新 必 殺 か ！ ？ ）

ついに自分にも必殺技か！そう思った時だ。周りからいつさい音がしなくなったのは。

首の後ろが寒くなる。胸のあたりがぞわぞわする。受けた傷がチクチクする。

ぞっとして前の柱を見たら、死神が笑っているように見えた。

「グングニル！」

（えっ？FFのオーディン？）

そう思った和彦の体も動いていた。

目の前の全てが遅くなる。同時に右足で柱を蹴って後ろへ飛ぶ。

（本日何度目かのバックジャンプ&スロー病……ん、あれは？）

目の前の柱の表面から黒い空間が出ていた。

（シミ？影？何だアレ？う……ん？）

よく見れば空間の中心から尖った何かがせり上がってきた。

（あ、分かった！これは！）

和彦はやっと理解した。これはベルゼーの青龍刀。その刃先だ恐らくベルゼーが柱を青龍刀で突いたのだろう。あまりに綺麗な突きは周りに無駄な破壊をせずに、すり抜けるように見えたのだ。

（なるほど。グングニルはあの黒い青龍刀の名前か。この空間はヒビすら許さぬベルゼーさんの華麗な突きだったのか。だからすり抜けたように見えたのか。そうなのか？そうだったのか。）

空中にバックジャンプしてわずか2秒。和彦は早くもピンチだった。

バーニングヘルゼーアタック（後書き）

いろいろあつて疲れたヨ。遅筆でほんとスマンアル。これからも精進するアル。

背中が痛い殺し屋

「あと何分だ!!」

『まだ無理です。それよりそっちで何とか出来ないんですか?』

「バズーカならまだしもハンドガンで出来るか!」

『なら落ち着いて。こっちも出来るだけ早くしてます』

廃工場の中でキジルは電話の相手に怒鳴り散らしていた。

なにせ倉庫の中では頭を抱えなくなる戦闘が行われているのだ。

『駄目ですね、どんなに急いでもあと2時間は・・・』

「なにい!・・・な、何とかしてくれ!」

『・・・善処します』

通信が切れる。キジルがあせる。2時間もかかったらカズヒコがペースト状されてもおかしくない。

過去の悪夢が蘇る。肉の塊とかした前ボス。

（ま、まずい!カズヒコも!レミトも!オレも!何もかも!お、終わってしまう!）

かといって今の自分にこの倉庫をぶち破れる武器は無い。どうこうする以前の問題に頭を痛める。

「くそ!油断しすぎだ!オレのバカがあ!」

そう言って車のボディを拳で思いっきり叩いた。

ガンッ!

「痛てええええええ!!」

愛車を殴った代償に手の皮から血が噴き出る。

（クソ!こんな事してる場合じゃねえ!今すぐ入り口を壊さないと

！しかしどうやって！)

今の自分に出来るだろうか？そう思った時だった。

(・・・・・・ん？)

何か見落としている。キジルはそう思った。

(・・・・・・武器？)

ふと自分の『愛車』を見た。

「・・・・・・バズーカの代わりにはなりそうだな」

その頃倉庫の中では和彦が空中でピンチだった。本人は

(ランラン♪ランラン♪ジグルベール♪クリスマス♪)

頭の中で一足早いクリスマスを迎えていた。正確に言うと目の前の突き進む凶器のせいで正気が保てなくなっている。

(・・・駄目だ。怖くて現実逃避できない)

本人は必死に現実逃避していたようだ。しかし和彦の目は通常どうり機能していた。

(じわじわ進んで来てるよ・・・・・・青龍刀が・・・関羽が・・・)

目の前の青龍刀が突き進んでくる。ゆっくりなのが余計怖い。

（ああ、このまま終わるのか……地味に良い人生だった……よね？）

和彦は考えた。このまま自分が死んだら自分はどこへ行くのだろうか。天国？地獄？

（行くとしたら大地獄だな）

.....

（絶対やだああああ！何とかしてくれええええ！）

ここにきて自分の体に頼む。ある意味究極の他力本願だろう。しかし体もこのまま死ぬのを良しとしなかった。というかもともと策があつて飛んだのだから。

(お！)

自分の両腕が勝手に動く。他人だつたら不気味過ぎる感覚だが。

（体さん！何とかしてくれ！）

和彦は歓迎した。人殺しは嫌だがこのまま死ぬのはもっと嫌だ。嫌だ嫌だで渡っていける世界ではないのだ。

両腕を水平に横に振る。銃を持ったまま。

（撃つ？でもこのままじゃ壁に……）

そこで気付いた。体が何をしようとしてるか。

（あ、バレットカーブ弾丸曲げするのか）

指が自然と引き金を引いていた。

ベルゼーが自分の青龍刀^{グングニル}を突き出した時だ。銃声が聞こえたのは。

（銃声！？）

目の前の柱を貫通する。それはあり得ない。

（跳弾か？しかしそれでも私の槍の方が速い！）

冷静に。あくまでも冷静に。防御の為に槍を引つ込める事などしない。

（何をしたかった知らんがもう避けられん！）

その時だ、柱の両側から弾丸が曲がってきたのは。

（なんだと！？）

ベルゼーの周りが遅くなる。彼もアドレナリンの魔法にかかった。

（錯覚ではない！曲がっている！馬鹿な！）

ベルゼーの目に映った弾丸は確かに曲がっていた。それも左右から回り込む二つ。

（二つ！？）

弾丸は確かに左右二つベルゼーに向かってきていた。

（マズイ！右のガードが間に合わん！）

現在の青龍刀^{グングニル}は柱を突き進んでる最中。これを引き抜いての防衛^{ガード}は間に合わない。

左の弾丸は腕を犠牲にすれば良い。それで被害は最小限で済む。しかし右はグングニルを突き出しているためガードが出来ない。

かといってこのまま突き進むのか言われたら別の疑問が浮上する。

（避けられる！）

相手はベルゼーの常識を越える相手だ。このまま突き刺さると思えない。なんらかの手段を持っている。

（く、道^{タオ}を使うとは、奴は一体！？）

そう考えている内に近づく弾丸。

（ク、間に合わん！考えている時間も
両側の弾丸が迫ってくる。

（ない！）

ドサッ！

「ウゲエー！」

和彦が背中から地面に落ちた。かなり無様な落ち方をしたが心は希望に満ちていた。

（やった！撃った！曲がった！倒した……はず！でも背中痛い……）

背中を擦りながら立ち上がる和彦。柱の向こうから一切音がしない。柱には青龍刀が突き刺さったままだ。先ほどまでこの槍に殺される所だったのだ。

（くそ、中国文化め……）

中国三千年の文化に喧嘩を売る和彦。

（それより勝った……かな？た、確かめよう……怖いけど……）

二丁拳銃を前に構え、柱から出る。

ここで誰かが柱から「わっ！」と言って出てきたら和彦は腰抜かすでは済まないだろう。

幸か不幸か。残念なことに柱の向こうはベルゼーしかないが。

恐怖半分、期待半分、の三分割で銃を構えながら柱の横から出た。

そこには

ベルゼーが腹から血を流して片膝をついていた。

出血の量が尋常ではない。血が無機質な石床を流れていく。

それを見て和彦は思った。

（やった！当たった！頭じゃないけど当たった！三国志！完！！！！）

遙か遠くに投げられた銃。投げられたショックで銃を放してしまっ
た。

目の前の関羽。武器が無い上に動けない自分。

（やばい・・・『雑兵対関羽』じゃん・・・）

絶対絶命の状況で人間がする行動は一つ。

（もう駄目だ。命乞いしよう・・・土下座だ・・・それしかない。
それ以外思いつかない）

もつとも動けないので土下座はできない。それくらい背中が痛かつ
た。あと何かいろいろ痛い。

（・・・しょうがない！誠心誠意あやまろう！古典的かつシンプル
に！！）

「ごm「ガッシャアアアアアアアアアン！！！！」！？」

入り口のシャッターに車が突っ込んでいた。

（なんだってええええええ！！こ、今度はメカ関羽か！？誰だ！？
車にいるのは！？）

「に、二度としねえ・・・愛車で突っ込むなんて・・・二度と・・・
ハッ！カズヒコ！」

そこには血だらけで運転席に座っているキジル。

（ハ& もといキジル！すっかり忘r「よかった！ミンチにされて
なかったか！」ひでえ！）

どうやらキジルの中では和彦はハンバーガーにされていたようだ。

倒れ込むように車から出るキジル。頭から血を流しているのはフロ
ントガラスのせいだろう。

（キジル！流血してる所悪いんだけど関羽をどうにかして！！！）

「おい！カズヒコ！No．IEはどこにいった！？」

（あほおおおおお！お前の目は節穴か！？目の前に）

『居ない』。目の前には誰も。

（居ねええええええ！テレポート！？）

ベルゼーはキジルが車で突っ込んだ際に別の脱出口に向かっていて、
巧妙に隠された外への入り口へ。

（まさか仲間くるとはな・・・今の私では無理だな）

あの時点で仲間が来るのは予想外だった。撃たれた胸部をおさえて
指定したポイントへ向かう。

（まあいい・・・今はな）

手に持ったグングニルを強く握る。心の中で燃え上がる殺意。

（・・・このままでは済ません。しかし最長老達にどう報告したも
のか）

ベルゼーの頭に浮かぶクロノスの最高権力者達。任務失敗の報告ほ
ど気まずいものはない。

目標ポイントまで100メートルの距離に到達する。

（この事覚えておくぞ・・・）

「カズヒコ・・・お前まさかNO・IIを倒すとは・・・」
(違う！絶対どこかに隠れてるんだ！！気を抜くなあ！！！)

倉庫には頭から血を流したキジルと応援部隊が来るまで一切気を抜かなかった和彦が取り残された。

奴が…奴が来る！！！（前書き）

ごめんね！長いつてレベルじゃねえぞ！てくらい休んでごめんね！

奴が…奴が来る!!!

「じゃあこれが書類と紹介書です。」
「どうも」

とあるビルの一室でのやりとり。中にいるのは二人の人間。中では書類の受け渡しが行われていた。ビルにそれ以外の人は居ない。

「いやあゝ。しかしオレもこの仕事長いけど、この業界で女性なんて珍しいね」

「そうでしょうね」

「い、いや！バカにしたワケじゃないんだ」

女性はデスクの書類と紹介状をまとめる。
何となく気まづくなる場をこまかすために片方の男性が言った。

「と、ところで本当にいいのか？ここは絶対ハードな仕事しかないよ？」

「かまいません。もとより覚悟の上です」

「ならいいんだが・・・ところで」

「あんた誰かに似てるな、誰だったけ？どこかで見たんだよ」
「・・・気のせいじゃないですか？よく言われますから」
女性は微笑みながら言った。

女性が部屋から出ていった後男性は机の上に残った契約書を見た。
「変わった人もいるもんだなあ」

男性は職業紹介所の闇業者だった。彼は仕事の客をよほどの事がないと選り好みしない。
例えばそれが女性でも、犯罪者でもだ。

「ま、人には色々あるだろうし詮索はオレの趣味じゃないからいいか」

デスクの上、残った書類をまとめる。そこで女性に紹介した場所の情報が見えた。

「……まさかここに行く人がいるなんてなあ」
そこは情報屋や職業紹介所の中でもここは最近絶賛でヤバイと評判の所だ。

「でもなんでもよりにもよってここへ？ああいう人ならもつと他に色々ありそうだけど」

彼の言う色々はいろんな色々だ。決して良い意味の色々ではない。

（娼婦館とか行けばいいのに……）

不謹慎かもしれないが先ほどの女性はそれほど美しかった。青の目と金の髪が素晴らしかった。

だからこそあそこに行く意味が分からない。性別関係なく全てにおいて危険だ。

しかしそこまで彼は考え、

「やめやめ。詮索は良い趣味じゃないぜ。お客様は神様だ」

彼の信条は『お客様は神様です！』だ。これは決して変えられない。そのためなら自分の考えは捨てる。手に持った紹介状のコピーを眺める。

「しかし、何故よりもよってレミト？長くはないだろ、よりによ

つてクロノスに喧嘩売ったしな。もう長くないだろ、あそこは」

大事な事なので二回言う業者。

「クロノスと抗争かあ・・・アリ対ライオン×12だな。しかしいくら先代がやられたからって仕返しするかね、フツ！。そして何故全滅確定のアリの巣に入るかね、あの人は。ゆとりか？ゆとりなのか？」

これが現代のゆとり！と思う男。その時ある考えが浮かんだ。

「そついえば、クロノスのN.O.・I.Iをレミトの殺し屋を倒したとか言う噂が一時期あつたけど・・・」

一時期流れたある噂。

『レミトの殺し屋がN.O.・I.I倒したつてよ！』

ウラの業界全体に突如として広がったこの噂は全ての人達のある一言を持って歓迎された。

『へえー（笑）』

ぶっちゃけみんな信じてなかった。最長老は実はゲイの方がまだ真実味がある。

大方どこかアホがN.O.・I.Iの名を偽って返り討ちにされたのだろう。

しかし彼だけがふと思った。これが、N.O.・I.I撃退の噂が本当な

らクロノスどうするのか？

当然レミトの女も子供も皆殺しだろうな、と周りは言っていた。しかし彼は違った。

『あのプライドも実力も無駄にでかいクロノスがそんな簡単に許すかあ？もつとねちねちとこつ…』
と言っのが彼の考えだった。

「ひよつとして…」

彼はふと思った。周りに無駄な破壊をせずにかつNo・IIを倒した化け物を潰す方法。

「あの人！レミトに入るのはその『殺し屋』暗殺のためだったりして！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「アホらしい。暇つぶしは終わりにして仕事にするか」
彼はそこで自分の妄想を打ち切り、次なる仕事に取りかかった。

その頃、ある公道で女性が歩きながら考えごとをしていた。その女性
性は先ほどビルから出てきた女性だった。

「やっぱり刺青タトゥーは隠すための人工皮膚はもう少し厚くした方がいい
かもしれません」

女性は少しだけ額にさわり自分の刺青タトゥーを隠しているか気にしていた。

「……まあ初対面にはばれないから任務に支障はないでしょう。さて」

女性は書類に記載されている地図をみるとここからかかる時間を考えた。

彼女はまたの名をN o . Iと言う。さて、どのN o . Iでしょう？

「少しだけ時間がありますね。どこかにジパングの料理屋があるといいんですが」

くとある会社

『5番さん』

「お！俺の番か」

「はい。えー、キジルさんですね？」

「おう」

「えー、キジルさん。車の保険金のことですが…」

「あ、ああ！そろそろ新車w」すいません。うちの会社では自車を

バスーカーにした人に保険金は…」

「
.
.
.
.
.
」
「
.
.
.
.
.
」

奴が…奴が来る!!!（後書き）

これからは『あんまり』休まないよう頑張るよ!とところで映画とかでビルに突撃した車って保険効くのか？

最高の出会い。

とある道路で一台の車が走る。

「いいか？レミトは人材不足だ。使える奴はどんな奴でも使う、でもな！」

車は運転手の命令道理に順調に走って行く。もつともその運転手は車の事をまるで気にしていなかったし、車窓に映る風景も道ばたの石くらいどうでも良かった。

「『使える』奴の話だ！お前は紹介されたから雇った！もし使えない奴だったらクビだ！」

「わかっています」

運転手のキジルはイライラしていた。自分の所属してるレミトファミリ―は人材不足のキワミにある。

だからどんな人材でも使う覚悟でいた。だがしかした。

キジルは本人が前にいるにも関わらず叫んだ。

「なんで！マフィアの募集で！女が来るんだ！」「前に車が来てますよ？」

悲鳴を上げながら車が大きく蛇行した。

(…一応ばれていないようですね)

私は心の中で胸をなで下ろした。一応敵地という事で警戒してたのですが…情報道理に私を見た人は居ないようだ。油断は禁物ですが。

車窓の風景が過ぎて行く中、私は一週間前を思い出していた。

〓一週間前〓

『No.Ⅰ、ここに呼ばれた理由を知っているか?』

私は長老会のトップ、最長老様に私は呼び出されていた。画面の前に跪く

ここに呼び出される理由。任務の報告、No.ⅩⅠⅠⅠの事、クリードⅡディスケンスの事など色々あるが。

「…No.Ⅱの事でしょうか」

『そうだ』

画面の向こうの老人、最長老様の顔が歪む。ここは長老会と連絡が

出来る場所であつて、この老人が本当にいる所は私を含み片手で足りる人物しか知らないのだ。

それはそうとN o . ? の件。

「……まさかあの情報は」
『忌々しい事に事実だ』

現在情報屋や裏社会で広がりつつある情報。ナンバーズストップ2、ベルゼーⅡロシユフオール。

その彼が負けた。それも中堅のマフィア、レミトファミリーの新米殺し屋に。

レミトがいる地域はベルゼーが担当していた所。しかし、クロノスとの抗争によりレミトは疲弊、当時のボスが殺された事が決定打となりあとはじわじわ弱っていくだけと思われていた。

実際私もそうだと思った。しかし、最近になって事態が色々な意味で急変したのだ。

突如として活発に動き出したレミト。背後に存在する謎の暗殺者。裏切ったN o . X I I I、同じくクリード、クリードを抹殺するために向かったN o . X、アッシュの死。

本来ならレミトが動き出した時にはすぐにも叩き潰す予定だったのだ。しかし、これらの事により全ては後手に回ってしまった。

そして気がつけばレミトファミリーはクロノスの下部組織では任せられない存在になっていたのだ。

まあ、それでもまだ敵ではなかった。クロノスの敵をするのはまだまだ役不足……だった』。

そこで組織が落ち着いた頃、ついに抹殺指令を出したのだ。標的はターゲット原因たる暗殺者。

相手の士気を落とすのは兵法の常識。

最初はN.O.？の部下達への任務だった。それをベルゼー自身の強い要望で彼がやる事になったのだ。

最初こそ疑問に思った私だったが、敗北なんて欠片も思わなかった。

そのベルゼーが敗北。

「……では」

『そうだ。No・I、その殺し屋を殺せ。これはクロノスの威信をかけた任務だ、失敗は許さん』

「…仰せのままに」

私に断る選択肢などない。受けた任務を速やかに達成する。

『と、言いたいがそれはまだ先だ』

「・・・？」

私は耳を疑った。今なんと？先？

「どういう…？」

『負傷したNo・？が言うには相手は道^{タオ}を体得してるそうだ』

道^{タオ}は異能力の名前。

その昔、異大陸からやってきた異能を持つ道士^{タオシー}。彼らはある一つの目標のためにその当時のクロノスに戦争を仕掛けたのだ。

曰く、『自分達こそが世界を支配するにふさわしい』

その後、起こった戦争は凄惨を極めた末にクロノスが勝利。しかし、その当時の時の番人は三人を残して全滅。

これが表す事は一つ、道タオという異能力がどれ程 世界クロノス を脅かすか。以後、道タオの能力を引き出す『神氣湯』、これの精製、取引、使用をクロノスは全面禁止をしたのだ。

その『道タオ』を使ってクロノスのN.O.？を倒す、相手は余程の命知らずのようだ。

（何でだ？最近何故か悪寒が止まんないな…はッ！まさか関羽の呪い！）

『道は元から絶たねばならん。お前が得るのはまず情報だ。神氣湯の出所を探れ』

「背後に居る道士を？」

『そうだ。断じて道の能力者を増やしてはならん』

神氣湯は道士しか精製出来ない。当然、標的は道士と繋がっている。クロノスに深い恨みを持つ道士と同じくレミトファミリー、この二つが良い結果を生む事は決して無いだろう。

現に能力者一人にN.O.？が敗北する事態。

・・・最長老様が危惧してるのはそれでしょう。

『標的の情報は後で送る。失敗は許さん。必ず道士諸共殺せ』
私は今度こそ大きく頭を下げた。

「仰せのままに」

目の前にはアパート。

「ここだぜ。お前がやるのはカズヒコのアシストだ。もっとも、カズヒコに本来ならアシストなんていらないんだが……どーもあの戦闘以来調子が悪くてな」

どうやら、No.？は任務達成とはいかないまでも十分な働きをしてくれた様ですね。

これなら……ココで任務を果たしても構わないでしょう。最長老様はやり方については指示してませんしね。

アパートのドアに近づく。相手が出てきた時のイメージをする。

得物は今持つてませんが、この男の首^{キシル}を折ることは出来る。出てきた標的^{ターゲット}を気絶させ、車で逃走。クロノス所有のビルで尋問。

……やれる。何の問題も無い。今回の目的は顔合わせ、しかも標的^{ターゲット}の道は銃がないと発動出来ないと分かっている。

そう思考してる時、キジルが扉を叩いた。

「カズヒコ居るか？キジルだ。話をしたアシストを連れて……
？開けるぞ」

私は身構えた。扉が開かれる。いざとなればすぐにでも行動に移せる様に。

狭いアパート、扉を開けばすぐに居間が見える。そこには。

まだ大人になりきれてない、

十五くらいの男がテレビの前で、

逆立ちしながら、両足でみかんを挟んでいた。しかも私を見ていた。

『さあーて！みかんを挟んだかな？それじゃ！にこにこ体操、
??????の構え！いくよ——！！！！』
テレビでは何故か血反吐を吐く子供達に混ざって女性が同じような
ポーズをしていた。

「ワン！ワン！」

犬も居た。

「よおジョン。カズヒコ何やってんだ？」
失礼、ジョンも居た。

私は初めて標的^{ターゲット}にある感情を抱いた。簡略化するところだ。

（…なんだコイツ）

和彦は???????の構えをしながら思った。

（ウホッ！いい女…）

これがナンバーズのエ、セフィリア＝アークス とレミットの殺し屋、
高山和彦の出会いである。

最高の出会い。（後書き）

遅くてごめんなさい。でも俺は悪く↑最低。??????の意
味は知りたかったら感想を↑クズの戯言です、気にしないでくだ
さい。

懐かしい泥の味

くアパート内く

今、この部屋の主人は台所で、三人分のお茶の用意をしていた。

（ある日くパパくと二人でく）

しかも中々上機嫌の様だ。この男にしては珍しい。

（語りくあつたさあく）

手に持っている紅茶をコップに注いだ。心の中で歌うとある歌も調子g

（Is this the real life? Is this
just fantasy? Caught in a la
ndslideく）

急にQUEENの『ボヘミアン・ラプソディ』になった。関連は全く無い。フレディ・マーキュリーもびっくりだろう。

（ふう… お茶はこれで良し！全ての良し！なんの問題もない！！！
あ、お茶菓子が無い、問題有り！）

実は和彦は興奮していた。これ以上無くだ。

（まさか！あんな超絶美人が！家に来るなんて！まさに鬼籍！じやなくて奇跡！！！）

和彦の頭の中を先ほど来た女性が九割区分占めていた。手は勝手に台所の棚をあさる。

流れる金の髪、女神のような顔、黄金比を表した体↑（意味は良く分かってない）。

おまけにあの目！碧水晶で出来たような目は全てを見通すような目だった。

あんな外人美人は未だ合った事が無かった。というか女性とあまり会っていない。

（あんな美人がこの世界にいるなんて！俺が出会った美人ベスト1、『ファミレスのお姉さん』を押さえて見事ベスト1だよ！ヒューヒュー！ワーワー！）

どうでも良いが棚の中のコーヒー缶はお茶菓子にはならない。

適当なクッキーの袋を探すと、それを掴む。

（アシストかぁ、そんなんで会いたくなかったな…もっとう…まあ贅沢は敵だ…）

お茶と袋を持ち、狭い台所を離れる。

（だがしかし！このチャンス！逃がしはしない！いや！もうこのチャンスはない！）

たぎるパワー、アドレナリンも今回は普通の仕事をした。神経を高ぶらせる、すなわち『興奮させる』

和彦は心の中で絶叫した。

（大事な大事なアタックチャンス——！！！！！！！！あれ？なんか違う？）

だいぶ、というか全部違う。

来ましたか……

「カズヒコ、遅かったな」「クウーン」

「……………」(ごめん、興奮のあまりワケわかんなくなってた)

リビングルームに入ってくる無表情の男。

この男こそが敵地^{ヨコ}の家主にして私の今回の標的^{ターゲット}、カズヒコ「タカヤマ」。

名前道理なら、この男はジパング出身と分かる。しかし暗殺者が実名を名乗っている事はあまり無い。

確認のための情報は夜に渡される予定ですが……

「……………」(やばい、至近距離で見るとさらに美人、何にも喋

れん)

「お気遣い無く」

しかし・・・本当に十五歳でしょうか？

黒い短髪は首まで、黒い目にはまるで何も映っていない。口は堅く結んだまま、表情からは何も浮かばない。見れば見る程年齢通りには見えない。

(な…なんでこっちを見るんだ。ヤバイ、緊張してきた・・・)

そして、私が本当に疑問に思った事は一つ、殺し屋らしくない。欠片も無い。血の二オイも殺気も、裏で生きてきた感じが無い…。

私はコップの紅茶を見た。毒は無い。経験で分かる。

(なんでコップを見…ハッ！まさか紅茶は嫌いなのか！畜生！俺のバカバカ！でも家にはもうマズイを超えたコーヒーしか無いよ！)

紅茶を飲んで私は考える。まだ任務をすべき時ではありません。今やるべきは情報収集。

出来る限りで情報を集めねば。

(飲んだ瞬間あの川の水を思い出したよ！泥水だったよ！だからその紅茶で勘弁し…あれ？飲まれてるヨー。ほっ)

安い紅茶の味が口に広がる。ここは情報を引き出すのに集中しましょう。

「さて、カズヒコ。そろそろ仕事の話に移っていいか？」

「……」(え？仕事？……ああ、ソウデシタネ。ソウイウお話でし

たね、ちっ)

無言でうなずく^{カズヒコ}標的。

こちらを見る目は何も映していない。一体何を考えてるのか…。彼が、??が負けたのも分かる。先が読めない動作、さらに道を使う^{タオ}のだ。なめてかかれば??の私とて死は免れない。

(美しすぎる、神は下界に慈愛の女神を落としたな…)

「さて、アシスト…そういえば名前は…えーと…あー？」

「アリア・ルートヴィヒです」

「ああ、そうそうアリアな、アリアだってよカズヒコ」

もつとも借りた名前ですけど。この名前の本当の女性は三年前に行方不明になったとか。

この男はともかく^{カズヒコ}標的は気付くかもしれません。戸籍の方も一応用心をしておきましょう。

(アリア…女神の名前はアリアかあ。『清楚そうで素晴らしい名前ですね!』って言えたらどんなに楽か…はあ、この人見知り直さないとメールアドレス聞くどころじゃないよ…)

「これからの任務は病み上がりのカズヒコだけじゃ不安なんだな。ボスの気遣いで^{アシスト}補助が来たワケだ」

「アシストのアリアです。お会い出来て光栄です、カズヒコさん」

「……」

まるで興味の無い目で見つめる^{カズヒコ}標的。…瞳には何も映していない。

（いはいはいはい！こっちが光栄ですとも！はい！）

「じゃ、任務の話に移るぞ」

「はい」「……」

（えっ？質問タイムは無いの？スイカ好きですか？塩かけますか？ハーフ？姉妹いますか？年上ですか？年上ですよ？…ひよっとして年増？）

さて、まずはクロノスにレミトが何をするのか聞きましょう。もっとも情報は筒抜けですがね。

（今日が光つてはっ！年増なんて思ってます！）

懐かしい泥の味（後書き）

今回短くてすいません。集中が切れてきました。GWは無理かな。無理だな↑オイ。

ところで！我が師にして我が友、にゃんこ太郎先生様が二作品目を書きました。

なんてうらやm、もといけしからん！そこで俺も書こうと思います。↑？2作品目です。ブラキヤではないですが。某有名作品の二次です。しかし作者は素人、？もとい2作品書けば更新がさらに遅くなる可能性もあります。

そこで読者の皆さんによくあるアンケートをしたいと思います。

？ 書け！2作品目！そこそこ期待するぞ！？ 書くな！終わらせ
てからだ！バカが！？ やかましい！てめえで決めろ！読者を煩わ
せんな！

作者はマジで悩んでいます。何も意見がない場合、あみだで決める
アル。では。

みんな楽しみ。

「ママーあれ買ってー」「駄目です！あんな高いもの！」

『五番B B K線まもなくフライト時間です』

「部長！今日中に会長と会談しなければ！」「わかってる！し、し
かしお土産のチョコ卵が……」

『迷子のお知らせです。二階レストランフロアに迷子の……』

「海行きたい海……！！！！」「今から行くのは砂漠だボケエ
！」

「俺、これが終わったら妹に……」「ただの旅行だろシスコン」

「忘れ物は無いな！さあフライトだ！」「先生、ジョニーが吐血し
ましたー」

人々の賑やかな話声はコンクリート製の床や壁に響く。

ここは空港、通称『シュークフルト』。

平常時でも多くの人々が活用する空港だ。この空港は人々の旅行、出
張にとりなう興奮で賑わっている。

そこに中央受付フロア、人々が新天地へ向かう準備をする場所。

そのベンチに一人の青年と犬が座っていた。

黒いスーツ、ネクタイ、革靴。それらを着込んだ青年は待ち合わせ
をしながらある事を考えていた。

その考えを聞いてみよう。

（旅行旅行旅行旅行旅行良好じゃなくて旅行！！こんな甘美な響き？が今まであっただろうか！ いや、無い！断じて無かった！今までは！しかし！これから始まるのだ！新世界ならぬ旅行が！）
彼にとって旅行するのは新世界が始まるのに等しいらしい。

（二日前）

アパート内で三人はある話をしていた。

「カーニバル…ですか」

「……」（カーニバル？リオの？半裸の人々が踊って練り歩くあの？）

「ワン？」

二人と一匹の視線を受けてキジルは正確な話を始めた。

「正確にいうとビスタシティで一年に一度開かれる開かれる毎年恒例『イモ投げ祭り』、まあカーニバルと言うより祭りだな」

「何故そこへ？」

セフィリア、もといアリアは疑問を投げかけた。

（何故イモ投げ？）

和彦はおそらく永遠に答えの出ない疑問を考え始めた。

「そこにクロノス所属のグレオ・ホーカーと言う幹部が来るらしい、内容は殺害だ。手段は自由」

キジルは紅茶を飲んだ。安い！としか言えない味しかなかった。

「この作戦は本来ならカズヒコ一人の仕事だったんが……『アレ』は予想外だな」

（？？の事ですか）

（関羽か…まさかその祭りにいたりしないよね？）

「まあ、今回のこの任務はココにいる俺達しか知らん。あとはボスとコリアだけだ。だから安心しろ カズヒコ！もうあんな事はレミトの威信にかけてません！」

絶対安心と念を押すキジル。

（グレオには長期休暇をとって貰いましょう。さてビスタシティにクロノス所属は……）

この時点でこの任務の失敗は確定した。

（何故かレミトの威信が信用できない………なんで？）

その隣に原因が居るのだが気付かない和彦。

「出発は二日後！空港の偽造パスポートは用意しておく、アシストの分もな。集合場所は『シュークフルト』の中央受付フロア、午前十時。服はスーツで来いだと」

和彦だけがあった。

（ん？空港？あれ？別名『空の玄関』と呼ばれるアレ？飛行機がビュンビュン飛ぶアレですか？）

和彦は今まで色々な仕事（犯罪）をしてきたがどれも車や電車で行ける場所だった。

それは奪われたレミトのシマを取り返すためだったからだが。

（と、という事は……！）

そう、和彦はこの世界で初めての海外旅行……ならぬ海外任務になる。

（異世界初の海外旅行が偽造パスポート！バ、バレる！だって『空港警察24時！』とかでやってたよ！あああああ！？あと銃！銃でバレル！！金属探検機、じゃなくて金属探知機で！つ、ついに逮捕される！！！弁護士iiiiiiii！！！！じゃなくて偽造は駄目だろ！！！！馬鹿め！）

殺し屋が今更何を言っているのか。あと馬鹿はお前だ。

（あれ？待てよ！これは任務だよな？と、ということはアリアさんも来るのか！うれしい！けど駄目だろ！経歴に傷が付くよ！いや！それ以前に女性がこんな事しちゃ駄目じゃん！犯罪絶対駄目！！！）
誰がやつても駄目である。

「要件はこれだけだ。ちなみ武器はトツドに送らせとく、だから武器は置いとけ」

（ほっ、これならバレな……いや！偽造でバレる可能性が！？）

「…偽造パスポートを造るのは誰だ？」（プロ中のプロをプリーズ！！！！）

和彦は久々に口を開いた。何故ならこれ一つで自分の将来が決まる。必死である。

（ほう…態度は無関心を装いつつ、言葉は真剣そのもの。やはりプロ……）
アリアはそう思った。

「え？…ああ、これもトツドだ」

（あ、あのモヒカン！？！？そんな細かい事出来んの？！駄目だ、不安になってきた）

「他に無いなら以上だ。ちなみにアシスト！てめえ新人りのくせに遅れたら承知しねえぞ！」

「肝に命じておきます」（さて計画を練りますか）

「……」（さて自首の用意を……）

く現在く

（旅行だあああああああああ……ハア）
和彦は一通り騒いだ。心の中で。

（もういいや……これまでの罪を悔い改めます神よ。でも最後に、俺も趣味に踊らされた哀れな被害者の一人に過ぎないんですよ）
和彦は逃げなかった。この二日間考えに考えてやめた。何故ならもう疲れたからだ。

（あー♪あー♪新世界ー♪ふんふん♪）
歌まで歌い出した。心の中で。

（うーうー♪……ん？）

そんな和彦を人々は避けて通る。その中に近づく一人の女性。

（あ、アレは……？）

スーツに身を包んだ麗しい体。
光輝く金髪が掛かった耳には金の逆三角形ピアス。

その女性の顔立ちは美しい以外の言葉が無く。

まるで女g（誰だ！？女神を召還したのは！？ってアリアさん?!）

「さすがカズヒコさん、お速いですね。集合十五分前に来たつもりでしたが」

「……一時間前に来た」

「…さすがですね」

（一時間前？なるほど、任務に対する執念ですか…）

（言えない、パスポートの事が心配で夜も眠れ無かったなんて…あとやっぱり旅行楽しみでした…）

「失礼」

「クウーン」

アリアは和彦の隣に座る。心の中で感涙の涙を流す和彦。和彦は思った。

（生まれういいや異世界イコに来て良かった…）

キジルが来る五分前まで、和彦は本人曰く至福の時を味わったと言った。

（ありがとう神よ……！なんか楽しくなってきた！！）

（ビスタシティ、楽しみですね。お手並み拝見させて頂きますよ、カズヒロ…）

（…あれ？なんか寒くなってきた？何で？）

みんな楽しみ。（後書き）

アンケートは締め切り！結果発表！ 第？作品目は……書かない！

参加してくれたkenさん、ムー民さん、博多のお塩さんありがとうございました

これからも頑張ります！

次話はイモ投げ祭り（のはず）！そして和彦は無事出国できるのか！？

次回もよろしくお願いします。

『イモ投げ祭り』

——二日前・セフィリア臨時宅——

「……今なんと？」

『ですからカズヒコ・タカヤマの資料はクロノスにありません』

「……馬鹿な」

クラーンタウンから数十メートル離れた所にある一軒家、そこでセフィリアが電話をしていた。

「本当に何もないのですか？」

『はい、レミトに入っている頃ならありますが…他、それ以前はありません』

その家はクロノスが支給した家だ。元の持ち主は現在は母なる海に沈んでいる。

「念を押すようですが本当に？」

『クロノス直属の情報網を使っていますが詳しい事はなにも…申し訳ございません』

そのセフィリアは驚きを隠せなかった。原因は現在の電話にある。

今回の任務の標的^{ターゲット}たるカズヒコの情報収集、それがまったく進んで無いからだ。

情報収集に使った情報網はクロノスの精鋭とも言える情報屋達。

その彼らが探して標的の情報の一つも無し。

（レミトが隠した？いや、そんな力はないはず。ましてや我々（クロノス）から隠蔽するなど…）

レミトは人材・経済・影響力ともクロノスのはるか下、こんな事は出来ない。

それでも一応は聞くのが彼女だ。

「情報の痕跡を消したという事は？」

『ありえません。我々を騙すのは不可能に近いです。…消した、と言うより元から無かったとしか思えません』

（本当にジパング生まれかどうかも怪しくなってきましたね）

「分かりました。引き続き調査をお願いします」

『ハッ！』

ガチャン

電話を置いたセフィリア。イスに座ると彼女はしばらくそのままです。
いた。

そして何かを思いついた様な感じで電話を取った。

「私です。実はビスタシティに二十名程の派遣を……」

そんなぐらゐ考へとけ」

「すいません」(やはりプランBですか。周りに被害が出る為あまり使いたくないが…)

(ああごめんねトッド。僕は君の事を勘違いしていた。君はやればできるモヒカンだったんだよ!)

「さあ行くぞ。覚悟しておけ、俺は昔ここに来たが…まさにイモ洗
い状態だった…」

「そうなんですか…」(ほう。まあ、彼らなら大丈夫でしょう)

(ハハハハハハハ！何をおしやるキジルさん！俺は近所の祭りでも迷わなかった達人だよ？そのあまりの達人ぶりに友人達から『動くな和彦殺すぞてめえ！』というあだ名を小学生時に付けられてたんだぜ？とところで『イモ洗い状態』ってイモ投げ祭りと同じかってる？)

「ワン！ワンワン！」

内面はハイテンションな和彦。それに対して外面は常に汗一つかいてない。器用だ。

色々なストレスから解放され一時的にハイになってるらしい。

空港の入り口へ向け、歩き出す三人と一匹。それぞれの思いを胸に。

(この任務を成功させればボスの…いや、レミットに恩返し出来るもんだ！見てろクロノス奴らめ！)

隣にいるのはナンバーズ隊長のNo.1だ。

『町内放送です。迷子のお知らせです。まずア行から——』
「長え！迷子異常だぞおい！」

そこはまさに戦場。

「血が！血が止まりません！」「痛い！誰だ！今投g「投げる！投げるんだあ！」お前かあ！」「誰だ！紅イモを投げたのは！？反則だぞ！」「ルールあんの？この祭り」「おおおおおお！？あの人は前回イモ食い大会第二十回優勝者！！」「イモ・ダイスキー・ニャンコタロウ」先生！」

飛び向かうイモ。

「弾…もといイモがもうありません！」「安心しろ、俺に策がある！！」「パパどこお？」

「救急車は…ゲフツ、いつ来るんだ…？」「あと三十分く…心臓が止まったか…」

「この帝王ニャンコタロウは祭りにおいては一切躊躇はしない！」
「これが…帝王の力…だと！？」

路上で混ざり合うイモの破片と血と涙。

「痛てえ！うわっ！道路がス、スべる！もうやだこの祭り！」「この祭りで迷子…死を意味する！」「うわあ、あの車イモのせいでボコボコえっ？俺…の新車？」「後悔は無いんだ…俺の願いはこの祭りが…死亡者0で済むことだけだ」「いや、イモに当たっただけだろ」「第七小队全滅です！」

ここは世界で三十七番目に危険な祭り、ビスタシ
ティ『イモ投げ祭り』。

（よし！止めだ！！帰ろう！我が家へ！マイホームへ！）
和彦達はこの後徒歩でホテルへ行き、さらなる地獄^{ヒトコミ}を味わった。

『イモ投げ祭り』（後書き）

遅筆！それも圧倒的な！！

あ、帝王ニヤンコタロウは許可をニヤンコ太郎師匠から貰ってます。
あしからず。

それと作者は試験で一週間ほど休みます！勉強祭りだあ！
身につくかどうかはともかく……ね？

次回、ホテルですね。しばらく続きます、祭り。
スヴェン出そうかな……書けるか？俺に……
では読んで下さってありがとうございました。

窓からイモ。冷蔵庫にもイモ。

—— ホテル・ロビー ——

「はい。ご予約のレミトさんですね。三名様とペット一匹で？」

「おお」「はい」「……」「クウーン」

ビスタシティ唯一の巨大ホテル。名前は『キャツサバ』。ここに和彦達はやって来た。

（うわあああああ！ヒ、ヒトがゴミのy……ハッ！も、もうイモが来ない……？アレ？いつの間にホテルに？ここは？）

失礼。記憶が飛ぶ程の道を通ってきたらしい。下に恐ろしきはイモ投げ祭りの人ゴミ。

よく見ればキジルも和彦も服がよれよれである。顔色からは疲労も見える。

しかし、アリアだけは全く普通である。あの人ゴミを抜けて通常とほとんど変わらない。何故だろう？

（おお！さすがアリアさん！俺とは生きる世界が違うのですね！ビユーティフル！！ブラボー！！！！）

ブラボー！！！！はお前の頭だ。

そうこうしてる内にキジルは宿泊の受付を終えたようだ。

「たくつ、参ったぜ……ここの祭りだけは苦手だ」

「ご苦労様です」

「……」（ホテル初めてだな……民宿はあるけどあつ、待てよ！修学旅

行であつたな！)

その時、気づけばキジルの手にはかなり大きめのバックが。

(何ソレー？ハッ！？まさかイモ投げ祭りに使うイモ！？そ、そんなに投げるの？！)

「…ん？ああこれか？これはコリアからお前へのプレゼントだ。ここにあらかじめ預けといたのさ」

(へ？コリア？なんで？クリスマス？まだ先だよな？お裾分け？てか運ぶ？イモじゃないの？)

和彦の問題はすぐ解決した。

「気をつける、ひょっとしたら爆弾が入ってるかもしれん。手段を選ばんからなコリアは…」

(バクダン？ボンバーm………武器iiiiiiiiiiii！？！？じゅ、銃刀法違反だああああ！！！)

一つ言う。お前の仕事はなんだ？

「二度とあんな事はごめんだからな。安心しろ！トッドに言つて最高の武器^{ヤツ}を揃えたぞ」

(そんなのいらねえー！ー！てか重おおおおお！ー！何が入ってるの！？コレは！？)

渡されたバックはかなり重い。何が入っているのか……

「お待たせしましたお客様ー！」

「おう今行く！」

「……」（待つて！これ重いを越えてるヨーーーー！？一体何があ！
？何が入ってんの！？）

受付へ行くキジル。心の中で戦々恐々する不安な和彦。

それをアリア…セフィリアは冷めた目で見ていた。

「カズヒコ、ここの部屋だな」

「十五号室…間違いありませんここです」

（おお！なんて豪華そうな扉！…しかし）

受付が終わった三人と一匹は最上階に近い十八階に来ていた。この階にあるこの部屋こそ和彦が宿泊する部屋、『スイートルーム』だ。

しかし和彦は悩んでいた。

（い、いいのだろうが？俺だけこんな良い部屋で…）

なにせ割り当てられた部屋はランクで言えば 和彦↑キジル↑セフ

イリアだからだ。

（キジルはどうだ もとい、セフィリアさんが一番下のランクとは…許せん！！出来るくらいなら代わって差し上げたい！犬と一緒にやりむしろセフィリアさんと一緒だ）

とにかく不満があるそうだ。まあこんな美人を放っておけば男が廢る。

（こういう時こそ勇気を出して言うんだ和彦！！「部屋を代えませんかと！」と！！言うんだ！！！！）

このとき始めて自分の意志で人を殺した時の覚悟を持った和彦。彼は人生で五本指に入るくらいの勇気を出した。『人殺しの覚悟』好きな人に喋る覚悟』だ。

「じゃあカズヒコ十分後」
「アリア、部屋代えるか？」
「な、何！？」
「え？」

驚くキジル。なにせ久々に喋った相棒が自分の最上級の部屋を下っ端と代えると言ったのだ。そうなるのも無理は無い。アリアも驚いてる。

和彦本人は

（しゃああああああああ！！！！言えたああああ！！！！やれば出来たああああ！！！！ひゃほーーーーッ！！！！年上なのに『さん』付けるの忘れたけど！！！！敬語じゃないけど！！！！）

久々に喋れた事に感激していた。情けない事限らない奴である。

その問いに対するアリアの答えは、

（ついでにメアドをおs「お断りします」……なん…だと…？）

『ノー』だった。驚愕する和彦。

セフィリアは微笑んでこう言った。

「私のような新米にはまだ早いです。気にしないでください」

女神のような微笑みにこの言葉。

キジルは、礼儀正しい奴だと思った。

和彦は

（……え？女神？あつ、違う天使だよ絶対…^{エンジェル}）

もうここまですぐと色んな意味で幸せである。

「そつだぜカズヒコ。下っ端は常に下のランク、常識だぜ。裏社会は常に実力主義で縦社会だ」

（ええええええええ。何ソレー俺の時は何も無かったのに…）

それは和彦がヤケになって標的^{ターゲット}を殺しまくったからなのだが……。

「それにこここの下の部屋はイモが窓をぶち破る事があるぞ。危険だ」
（アリアさん！今すぐ俺の部屋にカムオン！！お顔に傷が付きます

ヨ！！！！）

（クソッ！！俺の意気地なし！！クララの……じゃなくて俺の馬鹿バカばか！！！！）
結局断られた和彦。

入った部屋は扉だけでなく中もひどく豪華だった。

まず和彦のアパートの倍はあるであろう部屋の広さ。

西洋風の内装は素晴らしい、の一言に尽きる。

（わー！別世界みたい！スゴイ！）
実際ここは和彦にとって異世界である。

真ん中にはでかいソファがありこれまたでかいテレビがある。

（……ブラヴォー）

バックをソファに置くと中を見回す。

（おお！！ベットでかい！いいね！でも犬と寝るのか……ってアレ？犬は？）

いつの間にか犬が居ない事に気付く和彦。バックが重すぎて忘れてたらしい。

ちなみに途中でアリアが持とうと進言したが、和彦は男の意地でこれを拒否した。

く回想く

（男の意地で渡せられない！！でも重いなあ…いやいや！アリアさんに持たせちゃ駄目だろ俺！！！）

（なるほど…得物^{エモ}を他人に持たせる程うかつではないですか…）

（ロビーまではいたよな。じゃあ部屋に来る時？）
心配する和彦。しかしすぐに考え直した。

（まあ、野良だし大丈夫だろう。イモでも食べてるのかな？）
大体あの犬は和彦よりホームレス経歴が長いのだ。よっぽど頼りになる。

そしてもう一回部屋を見た。この分ではまだまだ探索のしがいがありそうな部屋である。

——百十一号室——

「ええ標的は入りました。そちらでも分かりますね？間違いなく本人です」

三階の百十一号室でアリアは電話をしていた。

「それより殺気を出しませんでしたか？…いえ、感づかれたような言動がありましたから。ええ」

外では祭り特有の喧噪の声が途切れ途切れ聞こえる。

「では現時刻をもって開始です。やり方はあなたの好きなようにしてください結構です。ただし、どんなに長くとも十五分でお願いします」

携帯をきるアリア。裏社会特有のかすかな殺気が出ていた。

（出来るならここで死んで貰いたいのですが…『彼』なら…まあ、そのための保険です）

狭い窓からの空は何処までも澄みきっていた。

（気付いてるのか知れませんが、??を倒したお手並み…試させて
いただきますよう）

（何処も豪華ーこりやすごいやー。でもなんで冷蔵庫イモだけ詰ま
ってんの？ん？嫌がらせ？）

中がイモだけの冷蔵庫を見ている和彦。

その後ろで閉まっていた浴室^{シャワールーム}への扉が独りでに開いていたのを和彦
は知らなかった。

窓からイモ。冷蔵庫にもイモ。（後書き）

テスト最後の日……ガッ！（吐血）
遅くなってすいません。色々あつたんです。色々。ええ。

次回の仮題名『浴室からの来訪者！』

お楽しみにしても作者が書くとは限らないヨ↑オイ

ムスコさんを僕に！！

（アパート・和彦の部屋）

「クソがあ！全然無え！どこにやったあ！ここか！？」

ココ、和彦の部屋には現在招かれざる客が一名がいた。

それはある男、黒い手袋を付け、着ている黒いシャツには何故か『Christmas rose』と紅くプリントされている。

「おつ、このコーヒー缶の中は……うわあああ！な、何だコリヤ！！どぶ川が凝縮されたニオイがしやがる！オエエエ！！」

その彼は現在台所にあったコーヒー缶を開けてひどい目にあっていた。

彼の名前はナナシ。別にこの家主と親しいワケではない。彼がここに入ったのは立派な犯罪である。

別にただなんとなく見知らぬ人の家に入ってるワケではない。ちゃんと理由がある。

「どこにあるんだ！道士^{タオシー} との証拠はあ！！」

彼の仕事は泥棒請負人である。秘密結社クロノス専属の。

（まずいまずいまずいマズイ！！）

そんな彼は焦っていた。かつての泥棒の師に『落ち着く事が泥棒の奥義だ！』と言われてるにも関わらずに。

（ベツト！無い！クローゼツト！無い！台所！無い！俺！ヤバイイイイイ！！）

ナナシはフリーの泥棒請負人では無い。それは定期的に仕事が入ってくる事だ。

それはとても安定してる事。荒み行くこの裏社会ではプラスの事だ。

しかし、それは失敗は絶対[…]に許されない事でもある。

（ヤバイヤバイ！もし見つかりませんでしたじゃコロサレル！！）
彼がここに来たのは標的^{ターゲット}と道士^{タオシー}のつながりの証拠を見つける事だ。

（な…無い。マズイ。もしこの机に無かったら俺は……）
ところが侵入したはいいがそれらしき物はゼロ。怪しいところも無い。というか不自然な程物が無い。

唯一不自然な物と言ったら冷蔵庫に入っている物が全て保存食^{カップメン}だと言う事だ。

念のため全て開けて見たがあやしい物は何も無かった。中には乾燥

麵しかない。

そんな彼が鮮やかな手並みで探していった部屋も、残り一つを残して全てを探し尽くした。
そんな最後の一つ、机。

ところがコレも期待出来そうに無い。

なぜなら机の上はホコリしか無いからだ。ナナシは泣きなくなった。これでは自分はクビだ。

（神よ、せめて机の中は何かクロノスに言い訳出来る物が入ってま
すように……）

泥棒^{ナナシ}が神に願うのも珍しい。そしてついに彼は机の引き出しを開けた。

開けた机の中に入ってたのは

『猿でも分かる歴史』ジパング編』『猿でもわかる世界史』世界地図付き』

『恐怖！！Mr・ウイレレが語る異世界へ行き方』『猿でも分かる？法律編』犯罪ダメ、絶対』

「怪しすぎるーーーーッ！コレだあーーーー！！」

この後、クロノスの誇る暗号解読部隊は、創設以来始めて暗号が解けなかった。

ゝホテルゝ

ギイイイイッ

B級ホラー映画のような音を立てて開く浴室への扉。それを聞いて凍り付く和彦。

（えっ、何？入り口？）

音源は入り口近くの浴室の扉。そこに近寄れば扉が数センチだけ開いていた。

(…？最高級の部屋なのに建て付け悪いのかな？)

不安になる和彦。だが扉は急に開いた。

バタンツ！

(こっぴうのはホテルに言っべきkへっ？)

突然の音に思考が真っ白になる和彦。

(ハッ！まさかアリアさん！？！？窓をぶち抜くイモが怖くなって
お、俺の所にい！？だ、ダメですよアリアさん！！俺は(肉体的に)
まだ子供！！まず男女の清いつきあ)

開いた扉から出てくる人影。和彦の脳はソレを見た時、状況を正確に伝えた。

『なかから ナタを もった あやしいひと
が でてきた！』

「タカのマークの大正——」

全身をライダースーツとヘルメットで固めた不審者はナタを振り上げ襲いかかってきた。うなり声を上げて。

「ウオオオオオオオオオオオオ！！」

ナタを和彦目掛けて振り下ろす不審者。

「——せいやくうううううう！?!?」

謎の会社名を叫んだ和彦。

和彦の体は旅疲れも何のその、俊敏に両手で防御行為をした。ジャパンの伝統『真剣白羽取り』。

膠着状態に陥る部屋。ここで和彦はやっと考える余裕が出来た。

（ありのまm「シネエエエエ！！」なぜだああああ！！そして誰えええええ？！）

開く浴室のドア、飛びかかってきた謎の不審者、きらめくナタ。和彦は何が何だが分からなかった。

何があだが分からなかったが両手は放さなかった。というかもう体が言う事を聞いていない。

すでに敏感に生命の危機を感じていた。

「…お前誰だ？」

（ハッ！ま、まさかアリアさんの……お父さん！！「ムスメはヤラ
ンー！」ですか？！そ、そんなお父さん誤解です！！まだケー番も
聞いてません！！断じてそんないかがわしい行為や考えなど持つて
ませんよ！！だからナタをしまつて！！ね、ね！！）

真剣白羽取り状態のままの和彦の問いに答える不審者。

「クツクツクツ。もう知ってるんだろ？」

（なん…だと…？やはりお父様だと…？）

「貴様はこの街に来た時点で我々（クロノス）に狙われてるんだよ

…」

（我々？……な、何だと？！アリアさんは大家族の長女だったと
！？だからあんな大人びて…）

ものすごい思い違いである。

「俺以外にもお前を狙っている奴はいるんだが——」

（まさかそんなに姉妹兄弟が！？ハッ！そ、そういえば俺の友達が
「彼女を射んとすれば家族を射る」と言つてた！クソッ！どうすれ
ば良いんだたくさん居るぞ！？）

「——ここで終わらせればその分仕事が早く終わる。わかつたら時
間短縮ため…さつさとシネッ！！」

（な、な、もう死刑確定！？何故そんなに嫌われてるんだ俺！？と、
歳の差か？！歳の差なのか！？！お父さん年の差なんか関係ありま
せん！というかまだアリアさんと始まつてすらないです）

嫌われる要因は色々あるがまず始めにお前の仕事を言え。

「ウオオオオオオオオオオ！！」

かけ声と共に先ほどより強く押し込まれるナタ。

（まだだ！まだ始まってすらいらない恋のメロディーー！！吠えろマイボデイイイイイー！！）

和彦も黙ってはいない。アドレナリンの興奮作用とにこにこ体操で鍛えた体はナタを一センチも進ませない。日頃の鍛錬（？）は伊達ではない。

なにせ^{ベルゼ}関羽が怖くて毎日必死だったのだ。

「ウヌヌヌヌヌ……」

「クツ……」

固定されるナタ。再び止まるかと思われた現場は、^{からだ}和彦がそれを許さなかった。

「ムッ！！」

（えっ、何？）

突如、ナタを持った両手を右へ。逸れる刃。

（！？何を？！まさか頭突きか！？ハッ、躲せねえと思ってんのか

そのまま流れるような動作で手に持ったナタを突きつけた。そして一言。

「……悪い。だがまだ始まってないんだ」
（ほんとゴメン。マジで。でも斬ろうとしたしどっこいどっこいだよね？ね？）

（……でも痛そ）
和彦は左手で股間を押さえた。

ムスコさんを僕に！！（後書き）

更新！更新！

どうも。この前運動会で筋肉痛だった素人アル。
それだけヨ。うん。特に無いんだ。ゴメン。

次回も頑張って更新するヨ！きつと！

読んでくれてありがとう！また会おう！たぶん！

あと名無しさま。名前使用許可どうも。これからもヨロシクお願いします。

「…嫌われてる？」

ホテルの部屋はキレイだ。ランクはどうあれ一応はキレイにされてる。

従業員達の努力の結果と言えるだろう。

現在、ホテルの部屋はキレイとは言えなかった。部屋の中央でうずくまる不審者^{したい}があるからだ。

股間を押さえて泡を吹いてるからだ。ついで血の涙も流していた。

（し、しまった…返事が無いただの屍の様だ。というか俺はなんて事を……）

和彦は思案していた。他ならぬ部屋の景観をぶち壊すコレだ。もしこんなもの見られたら部屋に死体があるよりヒドイ騒ぎになるだろう。

（お、おまけに…コレどうしよう…）

和彦は手に持ったナタを見た。これは勘違いされても仕方ない。題名は『血泡吹くおじさん殺害事件』だ。犯人は子供探偵じゃなくても分かる。状況証拠バツチリだ。

「……」ゴソゴソ

とりあえずベットの下にナタを隠す和彦。

（後で考えよう後にしようそうしよう）
今さえよければそれで良い。まさに現代っ子である。

そのままオッサンを引きずろうと近づくと和彦。行き先は浴室へ、目的は人をしまうのだ。
心の中は後悔でいっぱいである。

（ああああどうしようお父さんに絶対認めてもらえないよ俺…あ！
そうだ！頭を殴れば記憶が…！）
未来のお父さんにトドメを刺そうとする和彦。

その時である。奇妙な音が聞こえたのは。

ブブブブツ。ゴトツ…！

（どわああああああ！？ごめんなさい！なんだか分からないけど生まれてきてごめんなさいいい！！でも人を殺したのは俺の体ですうう！！俺じゃないですうう！！）

異様にナーバスになつてゐるせいか謝りまくる和彦。おまけにお父さんを床に落とした。

良く聞けば音の出所は噂のお父さん——のポケットのようだ。

（なに！？ポケットから音が！？まさかお父さんのペットのキラーホーネットが俺に復讐を！？）

ポケットに殺人バチを飼う奴はいない。

ひとしきり続く音。和彦はビクビクして動けなかった。

（なんなんだこの音は。でもどこかで聞いた事あるような…？）

自分はコレに近い音を聞いたことがある。そう思っている和彦。答えは唐突に分かった。

ガチャ「おーい聞いているか一番？奇襲はどうなったんだ？」

（へっ？俺は和彦ですけど？一番？誰？）

ポケットから聞こえてくる声。和彦は思い立った。これは携帯だ。

「シカトか？返事をしろ一番。私が気が短いのは知ってるだろオーイ」（だ、誰だ？女性？アリアさんじゃないのは確かだが…出るべきか？）

聞こえる声は若い女性の声。和彦は知らない。知ってるはずのはお父さんは血泡を吹いてる。

電話の女性は返事が来ないことを不信に思ったようだ。声を荒げてきた。

「オイどうした！？返事しろ一番！！私が行くべきか！？オイコラ！！」

（何なんだよ！？クソお！！出るよ俺が出ればいいんだろ！！やけくそさ！）

ポッケに手をつ込み携帯を掴む。通話ボタンを押すと返事をした。

「和彦d「ブチッ」…」

返事した瞬間切れた。ヒドイものである。

（な、な、なんて無礼な！せっかく勇気をだして出たのに！誰だよ！？…は！？まさか！！）

和彦は見知らぬ電話の相手を夢想した。

（お、お母様！？なんて声がお若い！！セフィリアさんの遺伝子は九十%がお母様で出来ているのですね！これが美人の秘訣！遺伝の神秘！…あれ？俺って嫌われてる？）

どうでもいいが未来のお父様を床に落としたままだぞ、和彦。

——百十一号室——

「失敗？一番が？三十二番はどうしたのですか？彼はどうしたのですか？」

「いや、三十二番は位置が悪いつて…すいません」

「…彼にも困ったものです。保険の意味がない」

クロノ・ナンバーズ
時の番人の？？は困っていた。

彼女は今回の殺害任務を出来れば穩便に、具体的には他人がいないホテルの部屋でひっそりと和彦に死んで欲しかったのだ。

その為に危険を冒して『囷として』部下の一人を潜ませたというのに、作戦の肝たるもう一人が居なかったのだ。

外は祭りの真っ最中。本来なら暗殺には持ってこいの状況だがセフ

イリアは無用な殺しは好まない。ただし『好まない』であって『出
来ない』では無いのだ。

いよいよの時は街ごと吹っ飛ばす考えもある。

『それ』をしない為に腕利きの部下を連れてきたのだが…

「三十二番はどうにかならないのですか？」

「いやあくすいません。コレばかりは三十二番の気持ちしだい
私では…」

腕の利く人間は大抵扱いづらいモノ。今回が良い例である。

「…まあ良いでしょう。ところで一番は死んでないのですね？」

「はあ…一応そうみたいです。私が始末しますか？」

「生きていても死んでいてもどちらでも回収しなさい。二分後に標
的は部屋を離れます。一番の処分は任務の後です。ああそれと」
ターゲット

アリアは時計を見た。集合時間はすぐだ。

「部屋内の暗殺はもう良いです。標的は気付いているでしょう。我
々が狙っている事を」
ターゲット

「…ほんとにそうですかね？なんか大したこと無い気がしますけど」
「侮ってはいけません。ジパングの獅子はウサギを狩るのも全力を
出すと聞いてます。——ましてや相手は道士タオシーの飼い獅子です」

「…了解です。任務に戻ります。パターン五番で？」

「ええ、それで。ではまた」

携帯電話をしまう。アリアはわずかに殺気を出した。

「もしこの国を生きて出たなら——」
部屋の扉を開けると呟いた。

「——私自身の手で殺すしかない」
大の大人も気絶しそうな静かな気迫だった。——それと同時に
少しだけ寂しげでもあった。
彼女の良心がそうさせたのであろう。

バタンツ。

「輝ける明けの明朝おおおおっ……」ブォンツ……！

ガシャーン！！

「うおおおお！これが帝王の投げ方！ホテルの窓が砕けたー！
！」「芋が蒼く輝いた…だと！？」

「賠償も怖くないのか帝王は！？」「馬鹿な！？芋があんなに飛ぶ
なんて！！」

「我が恐れるは紅き芋のみ！賠償など恐るるに足らず！」

「こ、これが帝王の風格だと言わんばかりだあー！！！！！！」

「帝王ッ！帝王ッ！帝王ッ！！」「うおおおおおお！！」「芋
投げ祭り万歳いいい！！」

―注意―

『芋投げ祭り時は下の部屋は危険です。窓に芋が投げ込まれる時が
ございます。なお、その際負った怪我は当ホテルでは一切の責任を
問いませんのであしからず』

「…嫌われてる？」（後書き）

短い上に内容が薄ぺっらいクズ作者。それが素人です。

そんな私ですがそろそろお気に入り数が三百件。全ては読者様のお導きのおかげ。

これからどうかヨロシク。…それと感想設定を変えたので外部の人も書き込めるようにしました。読んでる人がいれただけ。[↑]（ネガティブ）

ところで新作を書きたⁱ

サライ（前書き）

タイトルに意味はないです。（キツパリ）

サライ

「ぜえぜえ」

「……………」

「……………」(キツイキツイもうダメだやめようちょっと止まろう休もう)

今、ある組織の三人は必死にホテルの階段を上っていた。

別に野球部の練習ではないし火事でもない。走るに値する理由がある。

「ぜえぜえぜえぜえ」

「……………」

「……………」(あれ？なんかだんだん楽に…………)」

キジルは若いとは言えない。アリアはこの程度の階段にへたばる体力は持ち合わせていない。

和彦はランナーズハイになっていた。

こんな事になったのは和彦の一言が原因である。

『部屋にナタ持ったお父…………おっさんが来た』

キジルは思った、クロノスか！？まさかこれも罠！？

アリアは思った、ああ、一番ですか。回収はもう済んだでしょうか？

和彦は思った、どうしようアリアさんに言うべきだろうか？あなたのお父さんが来ましたと。

その時エレベータが二つとも使われていたため階段を使っているの

だ。

「つ……着いた……ハアハア」

「……」（たうらいアニヨハセヨカレー……ハッ、俺は何を言って！？あれ？階段が終わってる？）

現代っ子ガンバレ。

「和彦さん、私が行きましょう」（一番が回収されていないなら面倒ですしね…）

アリアは一番がまだ部屋に居るなら口止めに消そうと考えていた。

尋問などされてはたまらない。ターゲット 標的はおそらく拷問にも長けている筈。

「何？」

「行きます」

（え？アリアさんが？ま、待て！中にいるのは君のお父さん…しまった！お父さんは海綿体が大重傷！犯人は俺！そんな惨状を見たアリアさんは……）

『きゃー！？お、お父さん！？まるで誰かに股間を蹴られたみたい
に！？』

びくびく

「ひどい！カズヒコさん最低です！」

（そんな事言わないでえええええ！！「ガチャ」ドアを開けちゃダメだああああ！！）

和彦は思った。
ああ、さよならマイ恋愛。

「誰もいませんよ、カズヒコさん」

（そう、中にいたのはあなたのお父さんへ？そんなはずは）
和彦が自身の部屋に入るとそこには誰も居なかった。

（あれ…？）

部屋には誰もいない。股間を押さえたおっさんなど影も形もない。

（……き、消えた！？馬鹿な！？確かに海綿体ムスコを殺つたのに！？夢だったのか！？）

「どうした！？暗殺者は何処だ！？」

「キジルさん、誰も居ません」

「なにぃ！？逃げたのかカズヒコ？！ちゃんと縛つたのか！？」

（いやいや！あの重傷で逃げれる『男』なんていないよふっー！？）

確かに普通は居ない。アリアの部下は迅速な仕事をしたようだ。

「敵がいたんじゃないかったのかカズヒコ！？」

「どうやら逃げたようですね」

「馬鹿野郎！カズヒコに限ってそんな事あるわけが…」

（お、おかしい…あの体で逃げたなんてあるわけが…）
和彦はこの難問に珍しく頭を捻っていた。

——エレベーター内——

『それで一番の様子は？』

「…あー。これは任務は無理だな。うん」

エレベーター内に居るのはホテルの従業員…の格好をしたクロノス
所属の女性。

名前は四番。彼女はこのホテルに潜入し、隊長セフィリアの命で一番と呼ばれ
ている男の回収にあたったのだ。

『そんなにヒドイのか？』

「ヒドイっか…コレは文字道理に再…起不…能だ…な。しばらくは絶対
無理」

そんな彼女は一番の状態を報告していた。

『わかった。一番には任務を外れてもらおう。ところでどこをやら
れたんだ？』

「え？な、何て言うか大事な所で少なくとも夜の戦…闘は不可能と言
うか何というか…」

『…？（目か？）』

（言えねえ…女性として言いたくねえ……）

普段男勝りな彼女も女性としてのプライドがあるようだ。
やられた部分が部分である。しばらくしてエレベータ内に到着を表
す音が鳴り響く。

「じゃあ通信切るぜ」

『了解。次の作戦を頼むぞ』

エレベータが開く。

まさか清掃用カートに人間が入ってるとは誰も思わないだろう。一
般人ならなおさらだ。
あとは裏口から出ればいいだけだ。

（しかしカズヒコねえ…強そうには見えなかったが…）
今回の任務を考える。

自分の見た感じではお世辞にも強そうには見えなかった。

（隊長が言うから間違いは無いはずなんだがなあ。どうも違うよう
な…まるで意志がないような）

しかし現に自分の仲間たる一番は再起不能にされている。一番は決
して弱いワケではない。と言う事は相手は一番より強いと言うわけ
だが…。

（まあいいや。弱かろうが強かろうが——）

一番を乗せた清掃用カートを雑に操作する。裏通りには表通りの祭
りの熱気が届かないようだ。

（殺せばいいんだ。例えば五人がかりの作戦でもな）

裏通りは熱気が届かなかったが、芋がそこらじゅうに散らかっていた。

サライ（後書き）

一言だけ。文章みじかい。次回こそは長く…無理か？

次回は五人対和彦！！お楽しみに！あとお気に入り三百！！皆様の
おかげです！

これからもだらだとお願いします。

ああ…明日は模試だ…。

狙撃兵 対 曲芸師

ビスタシティ―表通り―

この表通りは現在、戦場と化している。

歩けば人に当たり、足には芋（たまに人）が散乱してる。空からは芋が投げ込まれ、通りは所々血で赤く染まっている。まだ喧嘩祭りの方がマシである。

この通り沿いの店は二重にシャッターを閉めるか、壊されるの覚悟で店を開けている。

祭りの時期は売り上げが修理代を下回る。完全な赤字である。それでも店を開けるのは店のプライド、もしくはバカなのか。

そんな通りの店の一つ、ホテル『キャツサバ』。この祭りにも動じず通常営業を続ける剛の店だ。

今、そのホテルから出た三人の人間と一匹は表通りの喧噪に呆然としていた。

「出来れば二度と見たくなかった喧噪だぜ…」
「すごいですね」

そんな二人の感想に対し和彦は。

（ひょっとしたらこの街にディ。ニールランドがあるのかも…）

場違いな希望を抱いていた。本人曰く、そのくらいすごい喧噪だったらしい。

犬は頭に芋があたって吠えまくっていた。

「もう一回言うぜ！！グレオはこの先の広場で演説をする！！演説時間は覚えてるか！？」

「五時半！」

「そうだ！！方法は言ったと通りに民衆に紛れての狙い撃ちだ！！」

大声で和彦と話すキジル。内容は市長暗殺内容の再確認である。少なくとも大声で喋る内容では無い。しかしそうでもしないと確認のしようがないのだ。

「逃走経路は俺と新入r「ママどこおおお！！？」カズh「帝王ツ！帝王ツ！帝王ツ！」

「なんか言「誰だあ！！ワシにイモを投げた馬鹿者はあ！！？」「じい、この祭りの名前言ってみ」

「ウォー「貴様…何者だ？」「帝王…僕はお前を越える！！」

なにせ犬の遠吠えすら聞こえないのだ。悪夢のような喧噪である。和彦はもう二度とココに来ないと誓った。もう頭に何度イモが当たったか…。

（警察は何をやっているんだ！！クソツ！）
言わせて貰うがこの日に警察が出動すると暴動が起こりかねないのだ。

空気とともに吸い込む熱気と二酸化炭素。何かを踏む靴。これは本

当に祭りなのだろうか？
和彦がそう思っている頃だ、彼を狙う者が動いたのは。

熱気が風に運ばれる通り、彼はそこを覗いていた。

「あれが標的か？」
ターゲット
『そうだよ』

和彦が場所が芥子粒ほどに見える三階建てのビル、その屋上。一人の男がスコープを覗いていた。

「何というか…あいつら油断しすぎだろ。これがベルゼーさんを倒した組織か？」

「というか三十二番！お前何処行つてたんだよ！？一番が死んだぞ！色んな意味でな！！」
「しょうがないだろ。位置が悪かったんだ。あと色んな意味ってなんだ」

「わ、私に聞くな！それにへり用意してあつただろ！！」

「アレは振動が良くないんだ」

彼の^{コードネーム}名前は三十二番。知つての通りクロノス配属の一人だ。

「俺は繊細なんだよ。見ろ、緊張で手が震えてる」

「ウソつけ！お前プロだろ！！自分勝手な事しやがって！！」

彼の^{スナイパー}仕事は狙撃兵。それも凄腕のプロ。相棒のバレットM82を持つてこのビルの屋上にいる。本来なら彼は一番がホテルで和彦に襲いかかった時、空中でヘリから狙撃する筈だったのだ。

それを「位置が悪い」の一言でヘリの乗るのをやめたのだ。おかげで一番は瀕死である。

おまけにこれから隊長の許可なしに標的を撃つつもりなのだ。

「もういい！怒られても知らねえぞ！！」

「要はアイツを消せば良いんだろ？楽勝だな」

「…気を付けるよ」

「はっ？何に？」

「隊長に当てるなって事にだよ！！あの服高いんだよ！！」

「あー？はいはい」

彼は適当に相づちをうつと、スコープで再度標的に狙いを定めた。
標的の男は人^{カスビコ}ゴミに押されながらも前に進もうと必死である。

三十二番は思った。楽勝だこりゃ、と。

「恨みは無いけど…まあ、この業界ではよくあることだから…」

彼の相棒、バレットM82は今まで相手の顔や心臓をスイカ割りの

様にしてきた。
今回もそうだろう。

「バイ」

そう言っていつもの様に撃とうとした時だつた、異変に気付いたのは。

彼はスコープの先にとんでもない光景を見た。

「何ッ!？こ、これは!？」

(な、なんだこりゃ!?)

和彦は焦っていた。ある異変についてだ。

別に人ゴミからまた不審者おどろきものが出てきたワケではないし、この喧噪に吐き気を覚えたのではない。

(く、首が動かん!？フンッ！フンッ！！ダメだ動かない!!なん
でだ!？あれ?か、体まで!?)

首がある一点を見つめたまま動かないのだ。首だけでは無い。体全体が動かない。手も、目すらも。まるで出来の悪い石化の魔法にかかった様だ。

「カズヒコ？何やってるんだ？」

「広場は向こうですよ？」

（わ、わかってるけど体が…フンッ！ヤア！トオ！だ、ダメだこりや。なんだこりや…）

体は人通りの多い雑踏の中で止まり、顔は固定された。周りに狭い空間ができる。

周りの人々は迷惑そうに避けて通る。キジル達は不思議そうに和彦を見ていた。和彦としても周りの迷惑にはなりたくないが、動かないのでしょうがない。

（うう…まさかお父さんの丑の刻参りが俺に…）

蛇足だが、お父さんは現在病院で再起不能のための治療中である。わら束に釘を打つ暇はないだろう。

（…ん？なんだ？あのビル…何か光ってる？なんだ？）

そう思っている時、遠くのビルの屋上に何かが輝いているのを見つけた。それが三十二番のスコープ、彼が居るところである。

「おい？撃たないのか？」

「……」

「…？どうした？三十二番？」

「見てる」

「はあ？」

「あいて標的が俺を見てる！」

三十二番は自分とスコープが信じられなくなった。標的が見てる。

それも狙撃兵たる自分が。

今まで自分が標的を見ている事はあった。しかし、標的が自分を見る事はなかった。

「ッ！？標的が！？マジか！！この距離で！？」

「マジだ。バッチリ見てる。俺も信じられん…」

多くの人が通る雑踏の中、誰もが避けて通る空間の中でただ一人だけここを見ている。

「ど、どうする！？やめるか！？」

「…俺の勝手で作戦失敗してんだぞ。絶対に殺^ヤる。それに、気付いていてもどうもできん」

「相手は道を使^{タオ}うんだぞ！」

「曲^マげるだけだ。射程距離は伸^ノばせん」

呼吸を落ち着かせる。手の震えが止まる。

良く考えれば問題はない。相手が気付こうが気付きまいが殺せばいい。常識を思い出し、

再度、銃で狙う。

（この距離で狙撃兵スナイパーに抹殺者イレイザーが勝てるワケがねえ…）
銃の照準を合わせる。狙いは頭、その額。

（何か出来るならしてみる曲芸師…!!）

（!?!? なななな何してんの!?!）

和彦は自分の行動に驚いていた。自分の右手がポケットの銃を握り締めたのだ。彼の意志ではない。

いくらこの街が祭りの最中でも銃を出せばただでは済まないだろう。イタズラも度が過ぎればタダでは済まない。

（ちょ、ちょ、ちょ待て待て!! 右ポケットには確か…）

彼のスーツ、その右ポケットにはレミトファミリー幹部、コリアからの贈り物たる無駄に重いバックに入っていた二十四の凶器が一つ、回転式拳銃『M28』。少なくとも、街中で堂々と発砲する拳銃^モではない。おまけに装弾数六発、全て装弾済みである。

「カ、カズヒコ!？」

「?」(一体何故ココで...? 指令はまだの筈...まさか!?)

キジルとアリアが異変に気付く。アリアは一人の部下の存在を思い出していた。

(あわわわわわわわわ...)

周りには人人人。気付かれないなんてあり得ない。

(みんな離れろお! イモじゃなくて人肉が降ってくるぞ!! 血の雨だあ!! お願いだから誰か俺を止めるお! 俺の体は誰を狙っているんだ!? アリアさん! これは違うんです! 違いますよ!?! さ、裁判は嫌だああああ!!)

パニックの和彦。

和彦の体はそんな事に毛ほども動揺せず、遙か遠くの殺気に反応し、強く銃のグリップを握り締めた。

殺気と殺気の交差、和彦は誰かがビルに居るような気がした。三十二番は躊躇わずに引き金を引いた。

狙撃兵 対 曲芸師（後書き）

えゝ期末近づくこの季節、皆さんどうお過ごしでしょうか？

はい。そうです。期末の勉強です。つきましては一、二週間ほど勉強休みを…。

まあ、嘘つき素人の言うことなので更新するかもしれませんが↑無責任

無事に試験を越えたら…夏休み、頑張っていきます。

次回は『決着！？三十二番！』デース。

上から下へ

周りの風景が全て遅くなった時、和彦はまたか、と思った。またこれか、と思った。人々が楽しそうに歩く通りの中、和彦だけが重い気持ちを抱えていた。

（ま、また関羽^{ベルゼー}が来た！？いや、ずいぶん前に殺した人達の家族がお礼参りに？それともとうとう警察にバレた？！前の拳法使いが新たな技を編み出して復讐に？それともアレ？いやコレかもしれない、この前の任務で乗った電車で席を譲らなかつたおじいさんが…）

こういう具合にポンポン殺される原因らしきものが出てくるのだ。まあ、自分以外の時間が遅くなるのは大抵口くでもない事の始まりである。無理もない。

ヒュルルル…

聞こえてきたのは風、ではなく物体の回転音。目に写るのはボール、ではなく回転する弾丸。

風とボールならどんなに楽であろうか。

ギュルルルルルルッ！！

目に見える距離にきた回転する弾丸。このまま進めば面白いくらい簡単に死ぬだろう。というか、本人の心情的に死んだ方が良くもしれない。

それを許さないのが『彼の体』である。

アリアは、クロノス最強の抹殺者軍団の???は見ていた。レミト期待の殺し屋、その悪魔の所業を。

（俺を誰か止めてえ!!!今度こそ捕まるから!!!）

彼はポケットから素早く銃を取り出した。銃である。現在、この場所が祭りの最中、それでも迂闊すぎる行動であろう。

しかし、それより驚いた事がある。耳に聞こえる風を切る音。それは長年の勘によって分かる狙撃の音。

脳裏に浮かぶのは彼女の部下。

（何故だ!なんで銃弾が飛んでくるんだあ!!!おまけにいつもよりデカイぞ!!!そしてどうして俺は銃を取り出したんだ!?今すぐに逃げないと!!!）

狙撃された時の対処は回避と防御。主にこの二つである。この場合は、強度のある銃身で防ぐつもりだろうか？確かにこの人ゴミでは避ける事が出来ない。周囲の人を盾にするには遅い。

ところがアリアは自分の考えが甘い事を思い知らされる。

素早く銃を取り出した彼は、片手だけで銃口を向けた。狙いは迫り来る弾丸、ただ一つである。

（え？何？何するの？何を狙ってるの？ねえねえ？）

彼は現在進行形で向かってくる弾丸を、片手撃ちで相殺する気である。

リボルバーで、大口徑のライフル弾を、

それに気づくアリア、突然のカズヒコの凶行に目を開くキジル、周囲の人間も気付いたようだ。喧噪の中でわずかに驚愕の声が混じる。いづれ悲鳴が聞こえるだろう。

（……ま、まさかあの弾丸に当てる気じゃ……まさかね！無理でしょ！無理無理！聞いた事ないから！大体当てても無理だよ！大きさを倍くらい違ってもん！！）

ズドンッ！ズドンッ！！

和彦は撃った、一切の迷いなく。ハンマーが落ちて弾を撃ち出す。リボルバーが回る。硝煙が噴き出る。

周囲の人々も分かったのだろう、悲鳴が上がる。いずれこの通り中に広がるだろう。すぐにココを離れなければならない。

それでもアリアは目を離せなかった。その流れるような銃技に。

（マジで撃ったああああ！？おまわりさん！ここです！犯人はここにいます！あ、撃ったの俺だ）

撃ち出された銃弾は、天から向かってくる銃弾とかち合うべく進む。普通に考えればあり得ないだろう。飛んでくる弾丸を打ち落とすなど、不可能である。ましてや大口径のライフル弾。

しかし、確かに弾丸は確実に当たった。ぶつかり合う弾丸。ライフル弾は撃ち落とされる事こそ無かったが本来の進行方向が変わった。ずらされた弾丸は頭から右耳へ、わずかな肉片を弾き飛ばす。致命傷ではもちろん、ない。

離れ業をやつてのけた本人は無感動のままシワ一つ動かさない。目的は元々撃墜ではなく、方向を変える事にあっただけらしい。

機械のようだ、そうアリアは思った。人間の精密さではない。

（ぎゃああああああああっ！！！！耳が！俺の耳がぁ！！もうミュージシャンになれない！！）

ところが、ここからが悪魔の所業だったのだ。

（え？何？百メートル走の始まり？）

彼は拳銃を下ろすと、力強く、剣で切りつけるように、腕を振った。友人に手を振るように。

銃口が斜め上に向いた瞬間、発砲。

放たれた弾丸は上から下へ。天高くボールのような軌道を描いて、遠い遠い狙撃手^{スナイパー}のもとへ。絶対届かない距離を超えて、スコープ越しに目を白黒させてる狙撃手の頭へ入っていった。

髪を千切り、肉を裂いて、骨を砕いて。遙か彼方の敵は絶命した。自身気がつかないまま。

撃った張本人も気付いてないのに。

「カズヒコ！何やってんだオマエ！！」

（何やってんだ俺は！！）

「キヤーツ！ひ、人殺しよ！」「なんだなんだ！？何が起きた！？」「うおおおおっ！！帝王うううう！」「おい！お前ら何してる！？」「ウホツ！いい男！！」「パパが迷子になっちゃ………笑止、その程度か？」「なにい！？」「今の音はな「おまわりさん！！」」

「おい！あの店燃えてるぞ！！」「我が技の前に…散れい！！」「ぎゃああああああっ！！！！」「出た！帝王の『剛力夢想』だ！！」「あの技の前に倒れないヤツはい」「銃を捨てるお！今すぐに「誰だ？電柱に突き刺さってるヤツは」

忘れないでほしい。ここはカーニバルのど真ん中で、人ゴミの中だ。そこで銃を発砲した男。パニックにならないワケがない。

「クッ！に。逃げるぞ！！コツチだ！！」

「はい」（まさか…いえ、今はこの場を…）
「ウォーン！！」

（ま、待てよ。もしかしたらさっきのはスナイパーライフルじゃ…え？逃げる？この人ゴミを？おいおい冗談だろジョニー。こんな人ゴミで走ったらそれこそ大変なうわあああああああああ
っ！！）

上から下へ（後書き）

いやぁ…ヒドいなこりゃ。期末終わって書いたけど…。
どうも、期末が（色々な意味で）終わった作者です。久々の更新を
お待ちになってた皆さんどうもありが え？別に待ってない？……
ですよー！。

これから更新していきます。頑張ります。では。

…しかし、元々少ない文章力落ちたなあ…どうしよう……。

銃社会はイケナイ

「ゼエゼエ…カーニバルの最中とはいえ…狙撃に…気付かないとは…不覚」

汗だらけのキジルは悔やんでいた。

（クツ、自分が狙撃されていた事に気がつかなかったとは…痛い）
耳から血を流している和彦は驚いていた。

（三十二番の性格を考えれば十分考慮出来た。私としたことが迂闊…）
涼しい顔したアリアは、心の内で己の迂闊さを呪った。

現在この路地裏では三者三様のいい大人が、各々の行動を様々な感情で迎えていた。

あの騒動の後、三人は出来る限り人ゴミを素早く抜け、この人気のない路地裏に来た。和彦は人の海を泳ぐという貴重な経験をした。出来れば二度としない体験だった。

スーツはヨレヨレ、頭はクラクラ、片耳からは血が滴っていた。

しばらくして、キジルは拳を壁に叩きつけた。

「…いや待て！なんで今回の襲撃がバレてんだ！？この事を知ってるのはここに居る三人とボスとコリアのみのはず！」

スパイがいるから、もしくはレミトの威信がバツチり壊れているからであろう。そのスパイは涼しい顔で人が来ないように見張っていた。

何故真つ先に怪しまれないのか？それは秘密結社特有の二重三重のクロノス情報操作のおかげだ。それに、人員不足を解決するためにかなりの人数を採用したためでもある。

「カズヒコ。俺はボスに指示を仰いでみる」
キジルは携帯を取り出すと、和彦に言った。

「最悪の場合は今日中に撤退、何てことになるかもな…しばらくここに待機だ」

（賛成！大賛成ッ！！撤退賛成！！帰ろう帰ろう！！）
キジルはさらに奥の路地裏へ行った。和彦は撤退命令が出される事を強く、とても強く望んだ。

（良かった良かった！もう二度と国を出ないよ！むしろ部屋から出たくないよ！！）
空港でさんざん騒いでいたのは何処のどいつだ。行きはよいよい、帰りは怖いのが典型的な男である。

和彦は空を仰いだ。意味はない。強いて言うなら耳の流血が止まらないか淡く望んでみただけだ。

血は変わらずにタラタラと流れていく。効果はいま一つのようなだ。

（痛い…メチャ痛い…包帯はホテルに置いてきたし…気合いで止まらないかな？）

むしろこの程度で済んで幸いだろう。体に任せすぎで、痛みに対する耐性がなさ過ぎるのだ。

そう考えている時、アリアがゴソゴソとポケットを探り始めた。中から出てきたのは絆創膏。

そのまま自然な動作で彼に差し出した。

「どうぞ。私のでよければ…」

和彦は思った。

（これが女神の！！）
女神のなんだ。

「よろしければ、私が貼りましょうか？」

（え？マジで？ケアルガ？ケアルガですかアリアさん？）

どういう公式で絆創膏〓回復魔法になるのか？それはともかく無言で頷く和彦。

「では失礼して…」

屈んで、和彦の耳に手を伸ばすアリア。それは和彦に近づくことを意味する。

（アッー！！^{アリアさん}女神が！アリアさんの顔がドアップで！！アッーーー
ー！！！！）

何故か戦闘中以外でもアドレナリンが流れている和彦。顔のアップでこれだ。コイツがアリアの裸なんて見た日にゃ、出血多量で天国

特急だろう。その前にショック死か。

一方アリアは、

（あの距離に弾丸の威力、それがこの程度で済むなんて…）

そんなふうに冷徹な抹殺者の思考で考えていたが、知らぬが花だろう。

実際、和彦の脳内は花畑である。

和彦にとっての至福の時間、アリアにとって標的の戦力観察は、キジルが帰ってくる少し前まで続いた。

（あー、至福至福。河原じゃ考えられないね）

ホテル『キャッサバ』。和彦はあの後、ホテルへ戻って来ていた。ボスから指令がきたからだ。

内容は簡単明瞭で『ホテルへ待機、明日の飛行機で戻れ』というものだった。慎重なジェームズらしい指示と言える。

(…はあ。でも耳がなあ……)

浴室から出てきた和彦は、負傷した耳を触った。そこにはアリアが貼った絆創膏は無く、包帯が巻かれている。ホテルに戻る道中で医者に診せた結果、聴く事に以上はないそうだ。ただ肉片が取れたので形がおかしくなったらしい。

和彦は、初の海外旅行が一泊で終わった事を少し寂しく思っていたが、物騒な国だったしまあいいか、と思い直していた。背に腹は代えられない。

和彦は豪華なベットに寝そべると、目を瞑った。夜半にも関わらず、人々の熱の入った声が聞こえてくる。頭の中ではここに来た時の様々な情景が蘇る…。

どれも一つとしてまともな情景は無かった。

(しかしお父さんには悪い事したなあ…どこ行っただら？いや、それより誰が俺の耳を撃ったんだ!?)

おかげで耳が痛いし形変わるし…あ、でもそのおかげでアリアさんの顔のアップが見れたしイーブンかな？プラマイゼロ？あれはもう永久保存の――)

九割九分がアリアの事で埋まっているのは、どうしようもないだろう。そんな和彦もこの旅行で掴んだ事がある。

ベットの近くに置かれた、鉄色の物体。中の弾はもちろん装弾済みだ。この旅行の二度の襲撃は和彦に防衛本能を呼び起こした。すな

わち、殺し屋の基礎の基礎たる『武器を近くに置いとこ』を。

（日本が懐かしい…銃社会はイケナイ…何故人は争うのか……）
さんざん銃をぶっ放した人間の言うことではない。

——百十一号室——

「て、撤退！？何故です！？」

「何故も何も、完全にバレました。もう奇襲は意味がないでしょう」

アリアはレミトのボス、ジェイムズの命令を聞いた時、この作戦の失敗を確信した。

「我々はまだ出来ます！」

「あなた達が出来ても無駄です」

部下の任務への情熱も、アリアはキツパリと断った。状況、相手の力量、現在の戦力では勝てる見込みが殆ど無いと悟った。プロは分の悪い賭けはしない。特にクロノスの？？は。それよりもアリアは聞きたい事があった。

「それより三十二番はどうです？」

「さ、三十二番はその…」

部下の躊躇するような声が聞こえ、彼女は部下の死を知った。

「…仕方ありません。あなた達は今、ヘリでクラウンタウンへ向かいなさい」

「ク、クラウンタウン？という…」

「出来れば最小限で済ませたかったのですが、甘く見た報いですね」

私もまだ未熟、そう呟くアリア。だからこそ、もうミスは出来ない。次の言葉は和彦でも分かる程、明確な殺気が含まれていた。

「潰します、レミトを」

銃社会はイケナイ（後書き）

早急な気がするけど祭り編を終了。…色々あつて遅くなりました。なんか文章力とネタが尽きた感が……もう歳アル（オイ）。おまけに言いたくないのですが、夏休みに「アッー！」があるので、更新不定期になります。「アッー！」は当然俺の進路を決める「アッー！」なので受けざるを得ません。すいません。でも悪いのは「イッー！」高等学校の講師共が悪いんです。まさか十月の「アッー！」を八月にもつてくるとは思いませんでした。ちくしょう…。

次回、レミト壊滅編…かな？あつ、そういえば和彦の部屋、ナナシに荒らされたままだった。

リアルもSSもアレな作者ですが、これから何卒よろしくお願いします。

落ち目

明るい日、穏やかな朝日。和彦は目が覚めた。爽やかな朝である。そんな朝、地獄の底の亡者の顔をしてベットから起きる一つの影。

（あー？…あれ？）

寝起きの悪い和彦は、風景が違うのに気がついた。

（なんか部屋が貧相になつてゐる様な…あ、そうだな）
周りを見渡して思い出す。

（帰ってきたのか……）
自分の部屋に帰ってきた事を。

「クウーン」

（あゝ今日どうしようかな……）

和彦は朝からカップメンを食べていた。犬はその貧相な朝ご飯を、鼻を鳴らして恨めしそうに見ていた。仕方なく和彦はハム肉の固まりを置いた。電光石火、犬は全力でそれに食らいついた。見事な食いつぶりである。

（それにしてもおかしいな？この部屋、こんな汚かったかな？なんか所々物の位置が違うし、違和感があるような…）

それは旅行中にクロノス泥棒が入っていたせいだが…その泥棒も悲しいくらい無意味な物しか盗めなかった。

しかし、和彦は水と安全が金で買える国、ジャパンで生まれ育ったのだ。散々裏社会に片足突っ込んでいて、和彦は世界最悪の秘密結社に自分が狙われているとは露ほども気付かない。

（まあいいか。そういえば昔、友達に「お前の記憶力はミジンコ」って言われたな…今度からちゃんと片づけよう）

これで済ますあたり、和彦はひよつとしたら大物かもしれない。ただの馬鹿なのかもしれないが。

……実は何も考えてないだけかも知れない。

和彦がアホか悟りかは置いて、彼はテレビをつけた。ニュース番組は毎度毎度、似たような情報を繰り返している。

『——ビスタシティのイモ投げ祭りは最高潮の盛り上がりで、関係者からは今世紀最悪の祭りと評されてます。ご旅行の予定のある方は気を付けて。次は、グルーガ地方で喋る猿を見たという情報が』

（あゝ今日は何をしようか。そうだ！近所のベンさんにお土産の串イモを……ん？）

机の上で不気味に輝く存在。それは携帯。

（メールか？まさかもう仕事？いつそ見なかった振りを…）

朝から仕事のメールが来ると、大抵の人はガツクリする。和彦もそうである。ましてや仕事の内容は人殺しとか暗殺などの物騒極まりない仕事だ。

（でも他に仕事なんてないし……あきらめよう）

悲しいかな。見た目が（一応とはいえ）中学生の自分を雇ってくれる所など無いのだ。この仕事、内容は恐ろしくアレだが、金は目が飛ぶくらい高い。

まあ、どっちにしろここまで殺して今更やめるなど出来るわけがない。

和彦は携帯を開いた。メールが一通。それを開く。内容は簡素で、至急レミトの本部へ、というものだった。

（今度はなんだろう？あれか？また危険極まりない祭りへ？）

お前の仕事は断じて世界の祭りを駆け巡るお祭り男ではない、自分の命が飛ぶかもしれない仕事だ。

「せ、千イエンになります」

「…円」ボソッ

「ハ？」

「なんでもない」

和彦は代金を払い、この世界の紛らわしい通貨を文句を言うと、タクシーから降りた。ここに来るまで何度、途中で引き返そうと思ったことが…そのせいで仏頂面な顔がますます不機嫌な顔になっていた。

タクシーのおっちゃんはそんな和彦の顔に恐怖し、タクシーを猛スピードにしてその場から走り去った。

さぞ嫌な客だっただろう。

和彦はレミトのビルを見る。今まで何度もここに来たが、物騒な任務の話しか聞いた事がない。建物にこんな嫌悪感を抱くのは初めてだ。

亀と同じくらいの早さで、和彦は目的地へノロノロと進む。

エレベータが開く。中にいる人物は目的地に向かって進む。

（エレベータ
文明利器万歳。さて…）

最上階。廊下を渡って社長室、その実マフィアのボスの部屋へ。その扉の前に立つと、揺るんだネクタイを締め直す。

（せめて服装くらいはちゃんとしないと…）
そう思うならシャツにアイロンをかけてやれ。

服の水コリを一応払うと、ノックを二回する…ところまでは良かったが、返事がない。

一分、二分…待てども待てども返事はない。

（あれ？普段ならここで「入って良いよ」って言うのに…入っちゃダメ？留守？）

人を呼んどいてそれは無いだろう。

（あ、もしかして帰っていいのかな？なら遠慮なく…）
待てコラ。

和彦が常時ビュンビュン吹いてる臆病風に流されそうだった時、扉が自動的に開いた。

「…」

一応言つとくが、この扉は自動ドアではない。木製のドアだ。レミトの社長、ジェイムズはそんな所に金を使う男ではない。

実際、扉は不気味なギィィという音を出して開いた。

（アレ？デジャブが……）

自動でドアが開く、前回の事を思い出してみる和彦。前はナタを持ったお父さんが飛び出てきた。なら今回は？和彦は扉から距離をとった。懐の（本人曰く護身用の）拳銃を握る（護身にしてはデカイが）。

無機質なグリップからは欠片も安心感が湧いてこず、むしろ不安感を募らせる結果になった。

一応、念のため再度ノックを……してみたが返事はやはりない。いよいよ入るしかないようだ。

和彦は本人基準で呼吸を整えた。右手に銃を持ち、ゆっくりと扉を開ける。

そして嫌々、本当に嫌そうに部屋に入った。

広い社長室。大きく開いた窓からは暖かな日光が差し込む。その部屋の真ん中にある大きな机と椅子。
ジエームズはその黒い革製の椅子に座っていた。

和彦はホツとした。中にいたのが黒づくめの男とかじゃなくて良かったと思った。心から思った。

どうやら、窓から入った風が元々開いていたドアを開けたらしい。

拳銃をしまう。

（良かった変質者おとこざねじゃなかった。まったく社長、ノックしたんだから返事くらい…）

返事はない。

（…あれ？）

なるべく足音を大きく立てて、ジェイムズに近づく。ジェイムズは椅子に座ったまま動かない。

和彦は思った。

（む、無視！？そんなに任務失敗怒ってんの？！でも撤退命令出したのはあなたで……ん？）

和彦は気付いた。この日光降り注ぎ、軽やかな風が入る部屋に妙なニオイがすることに。

風に乗って届くこのニオイ。このニオイは…

（……）

和彦は震える手を伸ばし、椅子に座っているジェイムズに触れた。

レミトのボス、ジェイムズはゆっくりと机の上に崩れ落ちた。
和彦の震えていた手は一瞬で固まっていた。頭の中は一瞬で真っ白
になった。

ジェイムズの背中中は横一文字に切り裂かれ、背に文字の入った紙が、
傷を隠すように貼ってあった。

『天誅』

その倒れ方は、これからの和彦の未来を表しているようだった。

落ち目（後書き）

色々遅くなりました。本当にすいません。やる気が出なくて…スランプ？

その代わり、「アッー！」に受かりました。ワイー！…等価交換でやる気を取られたけど。

このままだったら続けていいものか…長期で休もつかない…どうしよう…。

次回こそレミト崩壊編のはず。クロノスのスーパー逆襲タイムの始まりですね。

そして和彦の転落人生の始まりですか。

タオハザード　くクリーンタウンの悪夢く

く社長室く

（君が代はくく）

日光が降り注ぐ部屋の中。

（千代に八千代にくく）

開けられた窓から爽やかな風を運ぶ。

（さざれくく石のくく）

そんな一室にいる一人の男。

（いわおとなりてえくく）

彼はそこで歌を止めた。歌がヒドイのではない。この世界では名前が変わってしまった、母国の歌である。何度も歌った。覚えてないでもない。

和彦は机を見た。机には亡きレミットのボスがいる。

暖かな日光は死体を照らし、穏やかな風は腐臭を運ぶ。相反する二つが見事にハーモニーを奏でる。

職業は抹殺者、性格は臆病、見事にハーモニーを奏でない男、和彦

は思った。

（もう現実逃避が出来なくなってきた…）

彼の唯一の逃げ場、精神世界は行きすぎて崩壊したのだろうか？
しかし、逃げられないなら現実で頑張るしかない。彼は携帯を取り出した。

街のカフェの一角、黒服の男がコーヒーを飲む。これがOLならば
さぞ華のある光景だが、相手はスキンヘッドのおっさんである。華
が枯れる。

そんな男、キジルは穏やかな風と暖かな日光を受け、常の任務のこ
とを忘れるが如く、普段は殺し合いの場にいる自分の緊張を解くが
如くリラックスしてゆく。

それに反して周りの緊張が高まってゆくに気付いているだろうか？

（ビスタシティは失敗だった…まさか情報が漏れてるとは…クソッ！）

コーヒーを啜る…というかガブ飲みする。

（だがここからだ！あともう少しいけばクロノスだって目じゃねえ！ボスと和彦がいりやあ、元のシマを取り返すどころかその倍だつて夢じゃねえ！）

叩きつけるようにカップを置く。息を抜いて空を見た。

雲一つ無い素晴らしい晴れ間。その時、キジルはメールが届いているのに気付いた。

吹き抜ける風に芳ばしいコーヒーの匂いが乗ってゆく。

キジルは爽やかな気持ちでメールを読んだ。件名は和彦。珍しいと思いつつも本文を読む。

『ボス死んだ』

爽やかな風は、野太い悲鳴を乗せて吹いてゆく。

くレミト本部、エレベータ内く

「テントウムシから???へ、獲物が死体^{エサ}に気づきました」

『気づきましたか…ビル内の人間は?』

「ビル内は誰もいません」

『…そうですね。プラン変更はなし、行きなさい』

「了解…よし、突入だ」

エレベータ内にいる五人の男達。一人は携帯を仕舞うとそう言った。その装備は極悪の一言に尽きる。身を包んだ対戦闘用の装備は、これから戦争へいきますと言っても通用するだろう。

それぞれが黒い銃器を手にし、一様に弾を送り込む。

銃器はM60、AK-47、自動小銃。刃物に銃剣。服は防弾チョッキで黒づくめ。三メートルの熊でも狩るのだろうか?社長室にいるのは和彦一人である。

そのうち、若者らしい一人がポツリと言った。

「あの野郎、さぞビックリしてるでしょうね…俺達^{クロノス}が今日は来ないとでも思ってたのかな」

「あまり無駄口を叩くなよ」

隊長格らしき一人が言う。あと二階で目的地に着く。

「拍子抜けだったのは確かだな。しかし、標的^{ターゲット}はもう俺達に気づい

てるかもな…着いた。行くぞ」

エレベーターの扉が開いていく。

〈社長室〉

ザ・チーム死神が迫っているその頃、和彦は珍しく未来の事を考えていた。

鼻にはポケットティッシュで栓をしている。死臭は非常に臭いと言う事を始めて知った。

和彦は殺しを素早く実行し、死体が新鮮なうちに去ってゆく…というか逃げている。

彼は口で息をしながら考えていた。

（どうしようどうしようどうしようハゲにここで待ってるって言わ

れたけど待つてたくない)

ウロウロしながら考える和彦。

部屋の中に死体があるという状況は好ましくない。和彦にとっても例外ではない。

(そ、そうだ！誰かにこの事を伝えなくては！でも今日ほとんど人いなかったような！?)

おお、珍しく頭が回ってる。

和彦はとりあえず下に行つて誰かに伝えようと思った。誰でもいいからこの事を伝えねば……。

扉を開けようとした和彦は――

(…あれ?)

――動けない。毎度毎度のアレだ。もはや習慣とかした忌まわしきアレ。

(またアレか！？で、でも待て。敵なんていないのに？え？どこ?)

しかし、アレは敵がいなければ発動しない。ここには死体と和彦のみ。

それにも関わらず体は勝手に動き、ドアノブを掴もうとした手は代わりに拳銃を握る。

（ま、まさか……！！）

和彦は推理した。己の知識を総動員して現状を考える。

人がいないビル。殺されたボス。死んだはずのボスから届いたメール。勝手に動き出す体。勝手に取り出される銃器——これらが示す答えは一つ。

（バイオハザードか）

体はドアの前で微動だにせずに、拳銃を強く握り締める。
遠くでエレベータの開く音がする。

タオハザード くクリーンタウンの悪夢く（後書き）

なんかもつ色々すいません。

しかもこれから書き始めるといってそうでもない……すいません。
ただ、中途半端に終わるつもりではないので、月に一回あるかないかと思っただけと良いです。

銃の手入れは大切にね。
(前書き)

魔法のボタンを押したら

千文字が消える

泣きたくなった。

銃の手入れは大切にね。

最上階、そのエレベータの前に男が五人。

この会社の社員ではもちろんない。そもそもこのビルは真つ当な会社ではない。

黒スーツの代わりに黒防弾チョッキ。携帯の代わりに無線機。手に手に銃器を持ったその姿は、ビジネス戦士ではなくテロリストの鏡だろう。

その中で一際大きい男が他の男に命令を出す。

「マックスとタッカーはここにいろ。待機だ。クリンチ、リムーバー、俺と来い」

マックスと呼ばれた男が返事を返した。

「待機？ステープラー、オレ達も一緒の方がいいんじゃない？」

「駄目だ。相手は室内だ。M60とMG3じゃ小回りが効かなすぎる」

マックスとタッカーの機関銃を見ると、ステープラーは言った。自動小銃をスライドさせ、弾丸を込める。

「一応は捕獲でいくぞ。??は神氣湯の出所を知りたがつてた。道士との繋がりもな…情報部の後始末をすればお小遣いが貰える」
「だ、だが駄目だったら…？」

クリンチが不安そうに聞いた。

弱気な発言だが、胸に差した銃剣はジョークでも弱気とは言えない。

「ビビるなよクリンチ。そんなときは豚のエサにして終わりだ、そう
だろ隊長？」

若者らしき声のリムーバーが言った。

「その通りだぜステーパー。リムーバーがいつぞやみたいにミス
さえしなけりやな」

タッカーがニヤツとしながら言った。

ゴツイ装備の下に隠れた肉体は、予想を裏切らないゴツイ肉体だ。

「まっただくだ…」

周りから笑いが漏れる。

「…行くぞ」

そう言った時、既に男達から冗談めいた雰囲気は消えていた。

（社長室）

現在この部屋には死臭を振りまく死体と、鼻にティッシュを詰めた男が一人。

正確に言うと故マフィアのボスの死体と、その専属殺し屋が一人だ。その男は現在、ある考えを反復させていた。それは…

（ゾンビに噛まれなければ大丈夫噛まれなければ大丈夫噛まれなければ大丈夫…）

……なんか説明するのも面倒くさい。

まあ一応しておこう。彼の体はいつもの自動殺人状態に陥り、周りに人がいなかったために死体が襲いかかってくるのではないかと思っっているのだ。ついに気が狂ったわけではない。

（でも噛まれたら…いや！ハーブがある。大丈夫だ！）

大丈夫じゃねえよ馬鹿め。ハーブで治ったら医者は破産だボケ。

（核が落ちる前にこの街から脱出しなきゃ！）

一言だけ。和彦、現実に戻りたくないのは分かるが戻ってこい。

（ああどうしようどうし…ん？こ、今度はなんだ…？）

混乱している頭を置いて、体は迅速に行動していった。

扉の向こうの敵は待っていてくれないのだ。

社長室、扉の前にいる三人。

三人の内、ステープラーは短く言った。

「予定通りいくぞ」

扉の鍵を閉めたのは獲物のささやかな抵抗のようだ。

「どけ。蹴破る」

残りの二人が銃を構える。

しばらくして…扉を蹴り壊す音が響いた。

三人が部屋へ突入した。各々の武器を構えて部屋に入る。中にいる人物を殺すため、部屋に入った。

「『なっ！！?!』」

入った瞬間、全員ビビった。
予想に反して真っ先に入ったのは人間ではなく、元人間だったからだ。

始末されたはずのレミトファミリーの元ボス、それが部屋の真ん中で突っ立っていた。
死体が立ってるのだ。

（こ、これが道！？弾丸を曲げるんじゃないのか！？）

ステープラーは油断していた。そりゃ死んでるはずの人間が立ってりゃ誰だってビビる。

しかし、よく見れば気がついたかも知れない。

死体の足下、その足が四本ある事に。

あの時、和彦の体は冷静に考えていた。
その時、頭の方は暴走していた。

——この部屋の遮蔽物のなさ、これは致命的である。机という手もあるがすぐにバレるだろう——

——美女の頼みならいざ知らず、パゲの命令など聞い

ている場合じゃない――

――特殊な物が必要である。自分を隠し、相手に致命的な一瞬のスキを生む遮蔽物が――

――今すぐ逃げる必要がある。アンブレラ 某製薬会社がこの街を壁で囲む前に――

どっちが頭か体かは嫌でも分かるだろう。この差はなんだろうかと考えてはいけない。

とにかく体は部屋にある物を見回し、気づいた。

自分を隠し、相手に致命的な一瞬のスキを生む最高の遮蔽物……元のボスの死体に。

さて、後ろでボスの死体という盾を構えている和彦はというと。

(……………吐く。あとなんで死体持つてるの？俺？ここは逃げる場面じゃないの？)

死臭と血のニオイ漂う盾のせいで、胃袋と心がギブアップ寸前だった。

ホントはすぐさま放したいのに放せない。これもある種の拷問であろうか？すでにゲロ吐きたい気分であつたが……体のせいかな？口が閉じて吐くことすら許せない。

もちろん体の方はお構いなしである。第一段階の成功を感じ取ると次の行動に移った。

左手で死体を持ち上げ、右手で素早く拳銃を構える。

（家に帰ったら体中を業務用洗剤でもみ洗いしなきゃ……ん？）

死体の背中に銃口をつける。追記だが和彦の拳銃は大口径の拳銃、護身用とは思えぬ威力がある。

心臓がドクドクと異常な速度で脈打ち始めた。血液中のアドレナリンが増えてゆく。

（ちょ、え？これってまさか）

ゆっくりと遅くなっていく時間。

（待て待てマテマテ！！止まれ！ホールドアップ！！止まって！フリーズ！というかフリーズ！！）

指が躊躇なく引き金を絞った。

（先生、ボクの体と言う事を聞いてくれません）

クルクル、というよりギョルギョルと凶暴に回る弾丸は、ジェイムズの背中の皮膚と死肉を貫通、多少弱まった速度で進んでゆく。

弾丸は主人の狙い通りの場所へ行き、自身に課せられた任務を果たす。弱まった速度でも問題ないだろう。驚愕で目が開いてる、敵の首に風穴開ける程度。

死人の体とステープラーの首に風穴が同時に開く。赤い噴水が吹き出す。

そばにいた二人は事態を完全に理解した。

道で死体が立っていたのではない。敵が物理的に死体を支えていたのだ。

「なっ!？」

「や、野郎!」

（ボスの死体に穴がああああああああ!どうすんのこれ?!これじゃ俺がまるで犯人じゃん?!い、いや!それよりもこんな事したら絶対化けて出て…えっ?この人達、誰?)

リムーバーはAK-47を構えた。素早く、良い反応だ。

だが和彦は（正確には体だが）それに対してさらなる奇抜な反応を見せた。

構えた死体を投げた。リムーバーに。

死体諸共に倒れ込むリムーバー。

「うがッ!？」

（投げちまったあああああああ!もう駄目だ!出る!絶対に枕元に化けて出る!あとアンタらホントに誰!?アンブレラ!?アンブレラなの?!）

百戦錬磨のプロですら驚愕するであろう、その鮮やかな手並み。

なにより元ボスの死体を投げるといふその行為。

「クソ!邪魔だ!テメェ自分とこのボスをなんだと……え?ま、待て!」

彼が最後に見たのは大口径の銃口で――

ズドンッ！

クリンチの方は固まっていた。

元来臆病な気質である。この部屋に入っただてから一分も経ってないだろう。まだ若すぎる殺し屋の素早く、鮮やかな手並みに動けないでいた。

なにせ、死体とは言え自分のボスを盾代わりに使い、人二人殺していて顔は無表情そのものである。

彼がこのくらいの年の頃は、死体のかわりに野球のボールを投げていた。

和彦がクリンチに方を向いた。頬に返り血がつき、仄暗い目でこちらを振り向いた。
もう死神の称号はコイツのものである。

ズドン！

「ぐああ！？」

「……」

クリンチがハンドガンを構えるより速く、和彦はその手を撃っていた。

銃声が轟くと共に手からハンドガンがこぼれ落ちる。

その0・5秒後には、既に彼の頭に狙いがつけられていた。

クリンチは思った。あ、死んだ。

和彦は思った。もうやだこのパターン。

和彦の指が引き金を引いた。弾丸が今、凶悪な唸りを上げてクリンチを襲う…

ガキッ！

弾丸が…

ガキッ！ガチッ！

弾…

ガキッガキッガキッガキッバッキン！！！！

死体を冒涇したせいだろうか？それとも本当に運がなくなってきたのだろうか？

クリンチにとっては幸福ラッキーな事に、和彦にとっては不幸アンラッキーな事が起きた。

銃の引き金がぶっ壊れた。

クリンチの目と胸にある銃剣がキラリと光った。
和彦は少し間を空けて思った。

(……あれ？やばくない？)

銃の手入れは大切にね。（後書き）

次回、銃剣対素手。

感想などの応援本当にありがとうございます。

話は変わりますが、相変わらずテストってクソですね。ケツ！

落ち着け、冷静になれ

街で、初老のお婆さんが買い袋からリンゴを落とした。

石畳の道路の方へ、コロコロと転がってゆく。お婆さんはそのリンゴを取るうと手を伸ばした。

穏やかな昼頃、日の光はその赤い実を映し出して――

――グシャッ――

黒い車が猛烈な勢いで弾き飛ばしていった。まるで闘牛のようであった。

幸いな事に、お婆さんではなくリンゴである。お婆さんはビビってへたり込んでしまった。

あと一センチ、手を伸ばしていたら腕ごと持ってゆかれただろう。

が、黒い車は走り去ってしまった。

中で超危険運転していた人物はたった今、人一人轢き殺し損ねた事など気づいていない。

気づける余裕が彼にはない。

「もっとスピード出ねえのかこのおんぼろがあああああ――！」

キジルは既に人生の危機を迎えているからだ。

く 本 社 ビ ル く

重装備の男が、左手で銃剣を抜いた。
鋼色の刀身が光る。

和彦は未練ゼロで手に持った銃を捨てた。
床を転がっていく壊れた拳銃。

立ち上がると同時に、銃剣を和彦に突き出す。
身体を後ろに逸らす和彦。
銃剣は肉を切れず、縛ってあったネクタイに切れ込みを入れただけ
だった。

手負いの獣と殺戮マシン、二人は睨み合う。

クリンチは思った。

このまま何もせず死ぬのだけは、自身のプライドと組織の威信に
かけて絶対に許されないと。

眼前の敵を睨む。敵は無機質な目でこちらを見ている。
ひどく緊張する。喉が渴く。新兵だった頃の度胸試しを思い出す。
捕虜を突き刺すアレだ。もっとも、今回は捕虜などではない、殺し
屋だ。

油断すれば、こちらが死ぬ。

一方、和彦も思っていた。

油断がそのまま死につながるこの戦場で、和彦はただ一つの事を考
えていた。

無機質な目を相手から逸らさずに、一つの事だけを――

（もう何もいらなから僕を家に帰して…）
油断しまくっていた。

体は相手の些細な行動を見逃すまいと目を見張っている。
頭はもう展開について行けなくなり、呆然としている。

（…そうだ。これは夢なんだ）

ついにヤバイ境地になってきた。

これはもしか、戦場にいる兵士がかかる病気、PTSD…

（目が覚めたら俺は普通の目立たない大学生で…）
目つきが悪くて友達が片手の指で足りる大学生だ。

（いつも通りの生活を送るんだ…そしてあわよくばアリアさんが現実！現実！にッ！）

そんなトウル―エンドねえよ！！目を覚ませよ！目を！！

等と言っているうちに、クリンチが動いた。

左手で銃剣を握り締めて、姿勢を低く、思いつきり和彦目掛けて突っ込む。重装備を着込んだ男とは思えない速度だ。黒い猪を思わせる。

目には決死の意思が宿っている。

和彦はふと思った。

（このまま殺されるのも…いいんじゃないかな。へへっ…）

どうやら、思っている以上にヤバイ境地に追い込まれているらしい。

しかし、思い通りにいかないのが人生。それがどんなに数奇な人生でも、だ。

右手で銃剣を持った手首を掴む。

こちらの左手は銃剣のかわりに手刀の構えを。

——ドスッ！——

「がッ！？」

右で相手を引き寄せ、相手のあばらへ手刀を突き出す。肺の空気が

全て吐き出され、呼吸が出来なくなる。地獄の苦しみは思考を真っ白に変える。

銃剣が手からこぼれ落ちる。

それがゆつくりと床に突き刺さるまでに、和彦は決着をつけていた。両手で相手の顔を固定。和彦はそのまま飛び上がってヒザで相手の頭を――

――ゴキヤッ！――

クリンチは糸の切れた人形のように倒れ込んだ。

和彦はヒザに嫌な感触を感じた。

感じた時こう思った。珍しく、本当に珍しく、思った事がそのまま口に出ていた。

「も……」

…も？

「も、も…モロヘイヤーーーー！！！！」

もろへいや？いや、もう嫌？

（うわあああああああああ占領満了難点スミレエエエエエエエエエエエエ！！！！！）

壊れた！遂に壊れた！！

「な、なあマックス…」
「…なんだ？」

エレベータの前に立つ二人の男。

「さっきの声だが…」
「ああ…」

タッカーは疑問に思っていた。

先程、仲間達が突入していった方向から聞こえて来た謎の声、「モロヘイヤー！」。

自分達の仲間は断じて仕事中にこんな事を叫ばない。

「…まさか」
「考えたくないが…」

その前に聞こえて来た銃声。あれは仲間が標的をおとなくさせようとしているのだと思っていた。

しかし、今となっては別の可能性が出てきた。

あの銃声は仲間が撃たれた音ではないか？
ひょっとして仲間は死んでいるのでは？

最悪の可能性を考えておくのもプロである。

「…どうするよ」
「どうもこうもないだろ？」

マックスはM60機関銃を構える。

「部屋ごとぶっ飛ばす。それしかない…下に何人いる？」

「六人くらい下っ端の奴らが…」

「そいつらも呼んどこう。あと???に連絡を…ん？おい、なんだあ
りゃ!？」

「へっ…は!？」

これから殺しにいく相手が、片手に銃剣持って廊下を全力疾走でコ
ツチに向かっている。

これだけ聞くと気が狂ったようだが、悲しいかな。これは現実であ
る。

(誰か俺を殺してくれ—————!!)

「な、なんだ!？」

「野郎ッ!!」

マックスが構え直すヒマもなかった。和彦は既に二人のいる所二メ
ートル弱まで迫っていた。

アドレナリンによる身体強化。感覚麻痺と興奮促進はこの時、異常
なまでにその効力を発揮していた。

なにせ、M60が火を噴いた時には既に銃身が掴まれていたのだから。
ら。

ストドドドドドドドドッ!

壁や天井に穴が次々と開いてゆく。ホコリと元天井が周りに降り注
ぐ。

銃身越しの振動を物ともせず、掴んだ銃身を上、相手の顔にそ
のまま叩きつけた。

「ぐあつ!？」

(誰か俺を殺してくれーーーー!!)

そのまま仰け反った相手の首を、銃剣が撫でる。皮膚を裂き血管を断ち切る。

真つ赤な噴水が吹き出し、和彦を赤く染めてゆく。

「マ、マックス!？」

(いつそひと思いに殺ってくれーーーー!!)

ひと思いに殺ってるのはお前だ。

などというツツコミもなんのその、和彦は迅速に次の哀れな獲物を手にかける。

「う、うわあああああ!!」

(贅沢いえる立場じゃないけど、苦しまずに殺してくれえええええええ!!)

どんなに凄い銃でも、持ち主が狙いをつけなければ無意味である。

大口径であるほど反動は強い。

泡くってるタツカーに向かって血の滴る銃剣を振るう。

銃剣は相手の眼球を裂いた。

「うぎゃあああああ!!」

傷ついた眼を庇うことも許さない。そのまま相手の顔を両手で押さえると、力尽くで右を向かず。

突然そんなことされれば当然首は…

——ボキッ!——

(甘き死よ来たれええええええええええ！！)

アカン、新手の狂信者に見えてきた。

和彦は荒い呼吸もそのまま、エレベーターに乗り込んだ。

（俺を、誰か、殺してくれー！！うわああああああん！！）

彼は一階のボタンを押した。

一階には銃で武装した六人の男達がいることも知らずに。

レミトファミリー所有のビル、その前に乱暴に黒い車が止まる。車のドアが乱暴に開かれる。出てきたのはキジルだ。

「ボスは一体……ん？ カズヒコ！？」

ビル入り口前に座り込んでいる一つの影。キジルは急いでその影の元へ駆けてゆく。

影は社長室にいるはずのカズヒコだった。黒いスーツの所々に血糊がべったりとついている。

「カ、カズヒコ！？どうしたんだお前…ボスは！？その血は！？」

「……待ち伏せだ」

「ク、クロノスか！？」

「……」

「クソッ！」

和彦は無言の肯定をした。

しかし、どうも様子がおかしい。そのままゆっくりと目を上に向けて空を見つめる。

（銃剣一本、相手は銃持った六人。それで掠り傷で済むってどうよ……）

和彦はあの後、六人を相手にナイフ一本で立ち向かい…なんと勝ってしまったのだ。

あの一時の自暴自棄テンションが過ぎ去った時、和彦は自分のした行為に漏らしそうになった。

（や、やっぱりさあ、死んで償うとかダメだよな？ね？生きて償うことにしよう。うんそうしよう）

和彦はいつもの和彦チキンに戻っていた。

「…そうか。とりあえずボスの死体だけでも回収さ」

和彦は凄い力でキジルの肩を掴んだ。

「キジル…ボスは死んだんだ」

「だ、だけだよ…はっ！」

（そ、そうか…オレ達が今からする事は泣き言を言うことじゃねえ、クロノスへの報復だって事か！）

（ボ、ボスを弾よけにしたなんて知れたら殺される…！）ガクガク

「…よし。とりあえず『モーロツク』に身を隠そうぜ。一応支部にも連絡したんだが誰も出ねえ…最悪の状況を考えてよさそうだ」

（ま、またあのモヒカンに会うのか……）

和彦とキジルは車に乗り込んだ。

落ち着け、冷静になれ（後書き）

初心はどこへ行ったのか…とりあえずごめんなさい。
展開に悩んで書けない病です。

でも『処刑人』『処刑人？』見てやっと思書けました。
そこそこ面白かったです。

次は久々にモヒカンですね。それと、新しい武器出します。

天然水苔 (前書き)

タイトルと本編は一切関係ございません。

天然水苔。

「そいつは大変だったな」

「大変なんてもんじゃねえだろ！クソツ！！あと二歩、いや三歩でレミトファミリーは…クソツ！」

（枝豆が十五、枝豆が十六、枝豆が……）

酒場『モーロックス』。そのバーカウンターで三人…いや、二人の男が話し合っていた。

もう一人の男は話そっちのけで枝豆から身を取り出す作業をしている。

さらにその取り出した身を山のように積み上げていた。

「クロノスの野郎！片っ端から仲間を殺して回ってやがる！！」

「そりやおめえ…本社を叩いたくらいだ。少なくとも近くの支部は全滅だな…」

「チクシヨウ！！」

（枝豆が全部で六十と七個…あと三十三個積み上げて山にすれば僕は極楽浄土へいけるんだ……）

残念だが、和彦の罪は枝豆積み上げた程度では許されない。せめて河原の石でやれ。

「他の支部はどうなんだ？」

「駄目だ、一日二日じゃここへはこれねえし、連絡もつかねえ」

「やられたな…レミトがシマを拡大中にあえて攻勢に出るか」

（見える。涅槃への道が…）

涅槃への道を見ている場合ではない。
二人の男の話は進む。

「これからどうすんだ？ 少しくらい世話してやってもいいぜ？ 叔父さんが豚肉料理屋やつてるんだ…」

「ふざけんな！ 俺たちが肉屋^{ブッチャー}に見えるか？ —— 復讐に決まってるだろ！！」

キジルはカウンターテーブルを拳で叩いた。目には怒りの炎が滾っている。

かなりどうでもいいが、今の衝撃で山となっていた枝豆が全部皿からこぼれた。

（ぎゃああああああ！？！ 贖罪枝豆山があああああ！？ 天は、天は俺の罪を許してくれないのか…）

今の天災ではなく人災である。

和彦が声に出さない悲鳴を上げている中、二人の話し合いは進む。

「正気かよ… キジル、レミトは負けたんだ。お前が突っ込んでいても何も変わらねえよ」

「俺だけじゃねえ！ カズヒコもいる！」

「同じだよ！ おまけにこれを聞けよ……」

トッドはラジオをつけた。ラジオから不規則なノイズと共に、あるニュースの事を言っている。

『緊急… ザザツ… ニュースです。先程、レミト貿易会社が所有するで社員ザザツ… 皆殺しにされるとい痛ましい事件が起きました。詳ザツ… 入ってきておりませんが、警察は生き残った二名に事情

を聞く方針で……名前はキジルザザツーカズヒコ・タカヤマを
全力で搜索して……」

「聞いたろ？クロノスはもうここの警察を掌握してる…外に出ただ
け捕まるぞ。それでサツからクロノスに引き渡されて終わりだ……
諦めろよ、キジル」

「馬鹿野郎ツ！俺はあきらめねえ！！それにより、これは死ん
だボスの弔い合戦でもある！」

（そう！ボスは死んだツ！もういないツ！俺が…蜂の巣にしたから
ああああああああああ）

「死んだ奴のために死ぬ気が…？」

「マフィアから仁義をとったら、何も残らねんだよ！！」

（逃げよう！もうこうなったら逃げるしかない！！今度こそ無理ツ
！ゲームオーバー！！どうにもならないよ！！）

なにやら熱い展開が横で繰り広げているようだが、和彦の知ったこ
とではない。

和彦の頭の中では絶望の音頭と脳内警報音が響いている。

（今度こそ無理…きつと警察に囲まれてあつという間に捕まってス
ピード裁判で逆転の可能性もなく刑務所いきさ。くさいメシ…レト
ルトカレーとレトルト餃子食って死刑の日まで怯えながら生きる
んだ……）

和彦、ここは日本じゃない。その場で銃殺が一番確率高いと思うぞ。
それに怯えてるのはいつもの事だ。

おまけに裁判やっても勝てる確率ゼロである。

それと食事は年中カップラーメンと時々外食では、むしろ栄養価的には刑務所食の方がいいかもしれない。

（うう…どうすればいいんだ…神様！俺に取るべき道を教えて下さい！！）

いまさら神頼みはマズイと思うが。

（仏様でもいい！アツラーでもいい！！もうこの際なんでもいいから！！）

数打ちや当たるといった問題ではない。

「カズヒコ、お前はとうする……おいやめるキジル。お前が死ぬのは勝手だ。だが、俺はカズヒコ自身がどうしたいか聞いてるんだ——なあカズヒコ、お前はまだ若い。ビジネスならまだしも復讐で殺しなんざやるもんじゃない」

（うんボク若いでも未来ない不思議。ああああどうしようどうしようどうしよう）

コップの中の水を見ている未来は見えない。

端から見ると顔が渋く見えるのが不思議である。ストレスは人の人相までも変えるらしい。

そしてストレスは和彦の^{コスモ}小宇宙を爆発させた。それは昔、友が言っていた言葉。

——誠心誠意ちゃんと謝れば、誰でも許してくれ

るよ、人間なもの――

（こ、これだアアアアアアアアアアっ！！！！）

これだ。これである。謝る。なんと素敵な響き。

我も人、彼も人。ならばなぜ絶対にわかり合えないという事がある？

（これだっ！これだよ俺！！裁判とか俺はやってないとか、そんなじゃない！悪い事をしたら謝る！子供だって出来る基本じゃないかっ！！）

その前に大前提として、人は人を殺してはいけないという不文律があるのだが。

というか…正気だろうか？

すでにこれはちょっとした戦争状態である。そんな中、いままで散々仲間を殺してきた張本人（本人にその気があったかどうかは別として）がノコノコ出てきたら…あとはわかりだろう。

どうやら、ストレスは脳味噌の重要な回路までも壊してしまうらしい。

…いや、元から壊れてるか？

「…決めた」

「ど、どうするんだ！？」

和彦が立ち上がった。

余談だが、最近の和彦はなんか死臭が漂っている気がする。異世界とはかくも人を変えてしまうのだろうか？

「キジル…俺は行く」

クロノスに謝りに行くという意味である。

「マジか！？いや、それでこそボスが認めた男！！」

「正気か！？死ぬぞカズヒコ！？」

「死なないさ」

なぜ死なないか？

和彦曰く、「人と人は話し合えばわかり合える」らしい

「生きて帰るつもり…ってわけか？」

「当たり前だ」

謝りにいくだけだから。

「……止めても無駄、みたいだな」

「あぁ」

天然水苔（後書き）

すみません。新しい武器だせねえ上に遅れる遅れる。

あと五、七話くらいで一区切りつけたいですね。トレインとはその後かな。たぶん。きっと。そうじゃないかな…？

こんな遅筆を未だに読んでくれる皆さんに感謝してます。ガチで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6549j/>

波乱万丈の野良犬

2011年6月25日19時26分発行